



京機短信

KEIKI short letter

No.363 2022.01.05

京機会(京都大学機械系同窓会) tel. & fax. 075-383-3713

E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp

URL: <http://www.keikikai.jp> 編集責任者 吉田英生

目次

- ・京機会とともに四半世紀……松久 寛 (pp. 2-9)
- ・京機会九州支部の歩み……藤川卓爾 (pp. 10-16)
- ・series わたしたちの研究 (10)ナノ・マイクロシステム工学研究室……土屋智由 (pp. 17-23)
- ・series わたしの仕事 (37)DMG森精機株式会社……廣野陽子 (pp. 24-34)
- ・連載「水彩スケッチ紀行」(6)……下間頼一 (pp. 35-36)
- ・オハイオとビル・ローズ君の思い出……天野 到 (pp. 37-40)
- ・京機会からのお知らせ…… (pp. 41-42)
- ・第8回 京機カフェ テニスカフェ報告……成瀬忠史 (pp. 43-44)
- ・関東支部写真同好会 第20回撮影会(2021年11月11日)の報告……山下真司 (pp. 45-46)
- ・京都の散歩道 (11)井上靖さんと朝比奈隆さん——文学と音楽の巨匠……編集人 (pp. 47-71)



2010年1月2日(土)下鴨神社 夜の初詣 スゴイ迫力でリアルな虎の絵馬です。
(編集人注: 12年前は平成22年だったのですね。紛らわしいですが今年(2022年)は
虎の勢いで新型コロナウイルスを抑えてほしいものです。)

©京都を歩くアルバム <http://kyoto-albumwalking2.cocolog-nifty.com/>

初笑い (『生きるとは、自分の物語をつくること』小川洋子 河合隼雄 新潮社(2008)、p.41より)

僕が最近作ったジョークがありましてね。部下を連れて外出して、戻ってきた時、みんな身分証明書を忘れてるんです。で、入り口で守衛さんに止められるんですね。「証明書がない人は入れません」と言われて、「いや、我々はここで働いてる」「何やってるの?」「私は天然記念物の……」「入ってよろしい。あなたは?」「私は伝統芸能の……」「ああ、どうぞ」言うて順番に入る。で、僕の番で「私、何もしてないんですが……」と言うたらね、「あ、それは長官ですね。失礼しました。どうぞ入ってください」となるわけ(笑)。

[京大名誉教授の河合隼雄(1928-2007)先生は、当時(2002-2006)文化庁長官。]

京機会とともに四半世紀

松久 寛 (S45/1970卒)

私が京機会と関わり始めたのは、京機会名簿の担当になった1995年ぐらいである。名簿の発行は3年に一度である。そのころの京機会は年に1回京大で1回の企業での集まりが開催されていた。また、組織としては会長などの役職はなく、事務局もなかった。京大での集まりは京大会館などで行われ主に高齢の会員と教員の数十人が参加していた。参加者は固定していて、このままでは、毎年参加者の平均年齢は1年ずつ増えていき、10年後はどうなるのかと心配になった。

そこで、永井将さん(1956年卒)と相談し、まず組織を整えることにした。1997年に会則を作り、会長を大矢根守哉名誉教授(1946年卒)にお願いした。事務局に段智子さんが就任した。大矢根先生は支部設立など多くのプランをお持ちであった。しかし、それを執行する体制が整っておらず、1年で辞任された。そこで、支部創設など本格的に京機会の充実を目指した。京機会の事務室としては、初めはコピー室に机を置いただけであった。そこで、先輩などが訪問されるので、8階の北山が見渡せる部屋を用意した。床は事務室仕様であったが、せっかくなので総長室なみの上等の赤いじゅうたんを敷いた。これで、雰囲気が良くなり、多くの人々が尋ねるようになった。



図1 赤じゅうたんの京機会室に50年会OBが来訪 (2000年5月)

まずは関西支部の設立であるが、九日会というのが戦後すぐ（または戦前？）から大阪にあった。毎月九日に大阪駅近くの会館に集まり昼食を取りながら懇談するものである。関西の企業人、教員が参加していた。若い人で、企業の役員とフランクに話ができると重宝にされていた人もいた。年に一回、大会を開催し福引などもあり、大いに盛り上がっていた。その世話をするのが当番会社であり、事務的な世話から財政の支援までやっていた。その若手の担当者は郵送する案内状の住所書きが大変であった。そのうちに、平日の昼間に参加することも難しくなり、会社として同窓会の世話をする雰囲気もなくなってきた。そして、年に一回だけの大会になり、それも持続が危ぶまれるようになっていた。そこで、1999年に九日会を関西支部に組織改編した。永井将さんと三津田恒夫さん（1971年卒）が規約づくり、組織づくりをされ、永井さんが初代支部長に就任された。九日会のやり方を取り入れ、毎年の当番企業を作り、そこから事務局長を出してもらうことにした。また、多くの京機会会員のいる企業から幹事を出して、みんなで運営する体制である。行事としては、支部総会のほかに、産学懇話会と異業種交流会をつくり、それぞれが講演会や企業見学会を年に3回ぐらい開催した。後日、九日会に親しみのある方たちが、以前と同じように9日（年に5回）昼食をともにする九日会を再開された。そのために気になるのが、旧九日会の約80万円の資産を関西支部に繰り入れたことである。新九日会の人たちは、そのことを知ってか知らぬかは分からぬが、何も言われぬ。

次は全国の支部作りである。幸い各地に組織作りの核になる方がおられた。具体的には、関東の熊澤正博さん（1968年卒）、中部の伊勢清貴さん（1978年卒）と鎌居健一郎さん（1978年卒）、中国の藤田卓一さん（1968年卒）である。2001年に、それぞれの地域の特性に応じて、関東支部は小澤三敏さん（1958年卒）、中部支部は松本和男さん（1966年卒）、中国四国支部は川口東白さん（1959年卒）という強力な支部長を選び、執行部体制を作り、2001年に支部設立総会を開催した。私は本部との連絡役として全支部の副支部長になった。各支部の行事に参加したので、結構多忙であったが、多くの知己を得た。その後、有能な支部長が続き、支部活動は充実した。

2002年に福岡の中田昌宏さん（1983年卒）から、京機会の支部活動は素晴らしい、福岡でも同じようなものを作りたいとの申し出があった。そこで、京機福岡の会を開催した。参加者を福岡だけではなく九州全域に広げようと、2003年に京

機九州の会を開催した。しかし、中田さんが転勤で九州を離れた。そこで、2005年に藤川卓爾さん（1967年卒）に九州支部を設立していただいた。

各支部はそれぞれの特性に応じた行事を開催している。関西支部は異業種交流会、産学懇話会、若手会のほかに並木宏徳さん（1969年卒）の発案で、京機カフェと称して、文楽鑑賞会、イノベーション研究会、大阪あそ歩、ビジネス倶楽部、産業歴史探訪、ゴルフ、ミュージック、テニス等の趣味を同じくする人たちの集まりを開催している。ここで、多くの人が自分の好みにあったものに参加するとともに、多くの人が主催者として活躍している。関東支部では、若手会が活躍している。組織の将来を考えると、喜ばしい活動である。中部支部では、毎年春に、企業ぐるみの新入社員歓迎の企画をしている。ここで、新入社員たちは心強い先輩に巡り合うことができる。中国四国支部では、人数も少なく面積も広いが、各地で魅力的な企画を開催している。私の一番の思い出は、宇部伊佐鉦山の石灰石の露天堀りである。まるで、オーストラリアかと思うような風景で、大型の重機で堀り、港までの30kmを専用的高速道路を大型のトラック（トラクター）が40トン積みトレーラ2両を連結して運んでいた。



図2 宇部伊佐鉦山の石灰石の露天堀り

九州支部は温泉巡りや壱岐、種子島や韓国の釜山での行事を開催するので、ほとんどの行事に旅行を兼ねて参加した。釜山では、コンテナを扱う港湾を見学し



図3 釜山港のガントリークレーン

た。コンテナを積んだトレーラをフェリーに乗せると、トラクターは切り離されて下船した。トレーラには韓国と日本のナンバープレートが付いており、九州に着くと、日本のトラクターが乗船し、トレーラを繋いで目的地まで運搬する仕組みである。これで、韓国で作った自動車部品などが日本に一晩で運ばれている。以前、現代の自動車に乗っており、修理部品がすぐに届くのでどうなっているのかと疑問に思っていた。

個人的に釜山から対馬にフェリーで渡った。対馬に行くには、高速フェリーで1時間と一番早くて安い行路である。フェリーを利用するのは、韓国の旅行者ばかりである。入管で日本のパスポートを持って並んでいると、係官が「日本の方はこちらにどうぞ」と空いている窓口に案内してくれた。一瞬、早く通関できると喜んだ。しかし、なぜこのような経路で来たのかとしつこく尋ねられ、鞆の隅々まで調べられた。釜山から対馬にくるすべての日本人を調べるのか、それとも私の挙動や風貌が原因なのか。

京都大学は1897年に機械と土木から始まった。よって、1997年の京大の設立100周年は機械教室の100周年でもある。100周年記念事業（正式事業名称：第二世紀記念事業会）の一環として寄付を集めた。寄付の用途としていくつかの事業も挙げられた。しかし、その実行が伴わなかった。そこで、卒業生へのリカレ

ント教育を行うことにし、実行は京機会各支部の総会に併設した。それによって、講師としての教員および受講者が、支部の総会に参加し、講演会経費も第二世紀記念事業基金から捻出することができた。基金も底をついてきたので、リカレント教育講演会は、2019年1月開催の第40回を以て終了した。次は2022年の125周年である。

京大での総会の参加者は高齢者が大半であった。そこで、1999年に若い人が参加する仕組みとして、先輩との交流会を作った。これは、総会の日には機械教室の玄関ロビーに会社のブースを作り、学生と先輩が交流するものである。この「学生と先輩の交流会」によって若手社員は会社の出張で京機会に参加し、学生は各社の実情を知ることができるという一石二鳥の企画である。そのうちに参加企業は増加し、玄関ロビー、教室から廊下まで使ったキャパシティいっぱいの100社になり、参加を制限するところまでいった。さらに、学生と緊密に交流するために



図4 廊下まで使用しての学生と先輩の交流会(2003年)

総会の懇親会にも参加してもらった。交流会には各社2名の参加でそのうち1名が懇親会に参加するとしても先輩だけで100名で、学生も同数程度の参加し、会場にあふれるようになった。生協の吉田食堂の1、2階をすべて使っても350名が限度であった。そこで、交流会は総会とは別日程での開催になった。初めのうちは無料であったが、2005年より参加費として一社5万円いただくことにした。これによって、京機会の収入が大幅に増加した。その後、7万円に値上げした。まさに、一石三鳥の行事である。

同窓会からの通信は、年に2回のニュースの郵送であった。しかし、それでは、



図5(a) 吉田食堂での懇親会（2003年、総会と交流会が同日開催）

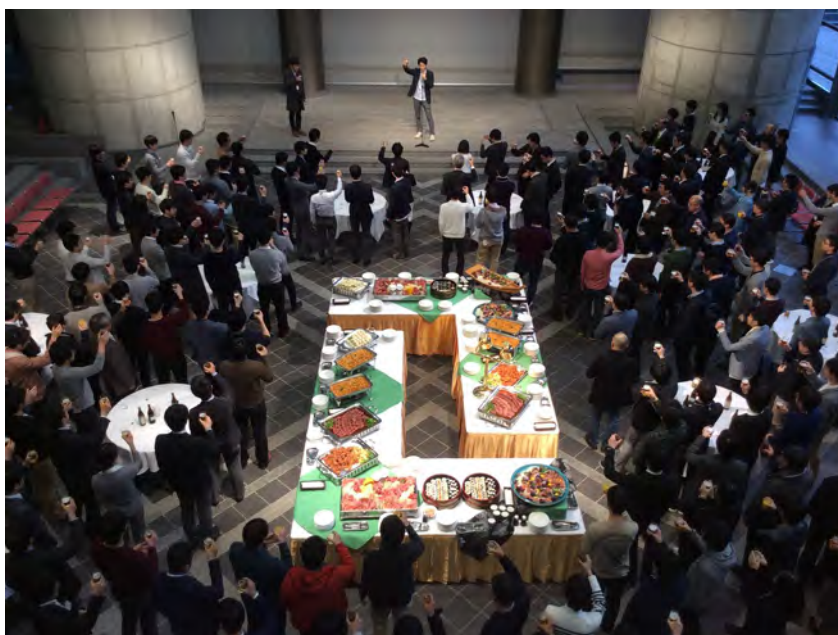


図5(b) 最近では交流会の開催場所を替えKRPでの懇親会（2017年、総会とは別日程）

即時性に劣り、費用がかかる。そこで、2004年に久保愛三さん（1966年卒）が月2回のe-mailによる京機短信を発行した。久保さんは300号まで一人で続け、2017年に吉田英生さん（1978年卒）にバトンタッチされ、最近は毎月発行されている。362号が2021年12月に発行された。久保さんと吉田さんの努力には頭が下がる。

同窓会ははじめ多くの組織の継続には、新陳代謝が必要であり、若い人の参加が求められている。2003年に教員の塩瀬隆之さん（1996年卒）の尽力で当時学生だった吉富聡さん（2003年卒）らが京機学生会（SMILE）を結成した。執行部の人たちが企業の見学旅行を企画し、先輩との交流会を担ってくれている。彼らは卒業後、各支部の若手会などで活躍している。



図6 初代SMILEのメンバー（京機会室にて）

以上のように、京機会は支部体制の充実、財政の確立、若手の活躍と3つの基礎が整っている。京機会は他大学の機械系の同窓会から、羨望の的となっている。なかには、東大の赤門会や慶応の三田会などと比較する人もいるが、それらは大

学全体の同窓会である。京機会のように一教室の同窓会としては、日本一、いや世界一であると思う。今後であるが、卒業生が集まって昔話に花を咲かすだけでは、どこの同窓会も同じである。社会に貢献できる同窓会でありたい。幸い、現支部長の千々木亨さん（1979年卒）のリーダーシップのもと九州支部が高校への技術の出前講義や工場の見学会を続けている。また、SDGsで何かできるのではないかと思う。日本のSDGsは環境が主であるが、その17の目標には、世界から貧困、差別をなくそうというのが多い。環境、貧困、差別などの取り組みがあれば、本当に日本一の同窓会になると思う。

私個人としては、かなり多くの時間を京機会活動に割いてきた。しかし、それ以上のものが得られた。年齢、地域、職業とも広範囲な知己を得て、仕事と遊びにおいて、その人脈は大いに役立った。たとえば、外国人をつれての森精機の工場見学においても、社長の森雅彦さん（1985年卒）の好意で宿泊まで手配してもらった。また、井手亜里さん（1977年卒）が中国の敦煌の洞窟の壁画の調査をするときに、京機会のメンバー十数人も連れていってくれ、非公開の洞窟や博物館の資料室まで見ることができた。京機会という言葉を聞くと、楽しい思い出が走馬灯のように次々と蘇ってくる。2012年に退職したが、今でも京機会の人脈のおかげで楽しく過ごしている。

最後に、京機会の設立時より事務局を担当されている段智子さんに感謝したい。段さんなくしては、今日の京機会は存在していないだろう。

京機会九州支部の歩み

京機会九州支部顧問 藤川卓爾 (S42/1967卒)

令和3(2021)年12月11日(土)に京機会九州支部のオンライン総会・懇親会が開催されました。話題提供の一つとして「九州支部の歩み」を振り返りましたので、ここに改めて紹介します。

京機会九州支部の歩み

年	西暦	月日	行事	イベント開催場所	県
H14	2002	11.23	福岡の会	KKRホテル博多	福岡
H15	2003	5.17	第1回九州の会	ステーションホテル小倉	福岡
H16	2004	11.20	第2回九州の会	三菱重工長崎造船所史料館, よひら	長崎
H17	2005	11.5, 6	設立総会	三菱重工阿蘇高原クラブ, 阿蘇	熊本
H18	2006	10.21	第2回総会	新日鐵八幡製鉄所, 千種ホテル	福岡
H19	2007	3.24	春の行事	九州国立博物館, 風見鶏	福岡
		10.20	第3回総会	TOTO歴史資料館, リーガロイヤルホテル	福岡
H20	2008	5.31, 6.1	初夏の行事	霧島国際ホテル, 韓国岳, 鹿児島	鹿児島
		10.25	第4回総会	長崎歴史文化博物館, 料亭青柳	長崎
H21	2009	3.28, 29	春の行事	三菱重工阿蘇高原クラブ, 阿蘇	熊本
		10.31	第5回総会	北九州エコタウン, 料亭金鍋	福岡
H22	2010	3.27, 28	春の行事	壱岐市立一支国博物館, 壱岐	長崎
		11.6	第6回総会	TOTO小倉工場, 松本清張記念館	福岡
H23	2011	4.23, 24	春の行事	種子島JAXA宇宙センター, 屋久島	鹿児島
		11.26, 27	第7回総会	三菱重工阿蘇高原クラブ, 阿蘇, 高千穂	熊本
H24	2012	4.14, 15	京機会春季大会	三菱重工長崎造船所, 軍艦島	長崎
		10.27, 28	第8回総会	西日本旅客鉄道, 門司, 下関	福岡
H25	2013	5.18, 19	春の行事	三井三池炭鉱関連史跡, 柳川史跡	福岡
		11.9, 10	第9回総会	TOTOファインセラミックス, 耶馬溪, 中津	大分
H26	2014	5.10, 11	春の行事	釜山国際コンテナターミナル, 慶州	韓国
		12.6, 7	第10回総会	長崎県立諫早高校, 小浜温泉, 雲仙	長崎
H27	2015	5.23, 24	春の行事	宇部興産グループセメント事業, 萩, 山口	山口
		12.5, 6	第11回総会	福岡県立小倉高校, 日本鑄鍛鋼, 筑豊	福岡
H28	2016	5.28, 29	春の行事	旭化成延岡工場, 高千穂	宮崎
		12.10, 11	第12回総会	明治学園中等学校, TOTOミュージアム	福岡
H29	2017	5.27, 28	春の行事	熊本城, サントリー熊本工場, 阿蘇	熊本
		11.25, 26	第13回総会	長崎精道三川台小学校, 三菱重工史料館	長崎
H30	2018	5.19, 20	春の行事	広瀬歴史記念館, 住友重機械, 別子銅山	愛媛
		10.28, 29	第14回総会	福岡県立修猷館高校, 九州電力玄海原子力発電所, 唐津, 有田	福岡 佐賀
R1	2019	6.22, 23	春の行事	JTAメンテナンスセンター, 首里城, 戦跡	沖縄
		11.30, 12.1	第15回総会	福岡県立東筑高校, TOTOミュージアム, 門司港駅, 関門海峡ミュージアム	福岡

京機会九州支部は平成17(2005)年に設立され、今年(2021年)で16周年になります。設立の3年前に松久寛教授(当時)(S45/1970卒)が呼びかけて中田昌宏さん(S58/1983卒)の幹事で「福岡の会」が開かれました。翌年は「九州の会」が小倉で開かれました。この年に中田さんが大阪に転任し、横浜から長崎に移った筆者が幹事を引き継ぎました。翌年は「第2回九州の会」を長崎で開きました。九州支部設立の翌々年からは、毎年春と秋の2回支部行事が開催され、平成24(2012)年には長崎で京機会の春季大会が開催されました。

京機会会員名簿に掲載された九州支部の写真集です。



会員数が少ない九州支部では毎回の行事でどれだけ参加者を集められるかが注目点で、10人以上を目標にしていました。写真集の左上から2番目の福岡県の大宰府で開催した時と、左下の鹿児島県の種子島で開催した時は30人近く集まりました。右下の京機会春季大会ではほぼ100人集まりました。これらの行事では本部や他支部から多くの参加者がありました。

4回にわたり南阿蘇の三菱重工阿蘇高原クラブに行きました。福岡県大宰府に行った時には二日市温泉で泊まりました。翌年は鹿児島県の霧島温泉に行きました。平成25(2013)年には大分県中津のTOTOの工場見学の後、八面山金色温泉に泊まりました。翌年には長崎県の雲仙温泉に、翌々年には宮崎県の高千穂温泉に行きました。これで九州7県のうち佐賀県を除く6県の温泉に行ったこととなります。佐賀県には嬉野温泉があります。また、大分県には別府温泉、鹿児島県には指宿温泉もあります。

「九州離島巡り」・「九州域外」

次に始めたのが「九州離島巡り」です。最初に壱岐に行き一支国博物館を見学しました。翌年は種子島に行き宇宙センターを見学しました。翌日に屋久島に足を延ばした人達もいます。九州には他にも対馬、五島、天草、奄美大島などの離島があります。

九州域外にも行きました。平成26(2014)年には韓国の釜山に行きコンテナターミナルの見学をしました。令和1(2019)年には沖縄へ行きJTAメンテナンスセンターの見学をしました。

「九州離島巡り」・「九州域外」

長崎	鹿児島		韓国	沖縄
壱岐	種子島 屋久島		釜山	那覇
H22春				
	H23春			
			H26春	
				R1春



「近代化産業遺産巡り」・「中国四国支部との共同開催」

次は「近代化産業遺産巡り」です。長崎での春季大会の時に長崎造船所、軍艦島、小菅修船所の見学をしました。翌年には三池港と三池炭鉱に行きました。さらに2年後に八幡製鉄所、河内ダム、遠賀川水源ポンプ場の見学をしました。

お隣の中国四国支部との共同開催も2回ありました。平成27(2015)年には山口県の宇部で宇部興産の石灰石鉱山の見学、翌日は萩、山口の観光をしました。平成30

年(2018)年には愛媛県の新居浜で広瀬歴史記念館と住友重機械の工場見学、翌日は別子銅山の観光をしました。

「近代化産業遺産巡り」

	長崎	福岡
H24春	長崎造船所史料館 軍艦島, 小菅修船所	
H25春		三井三池炭鉱, 三池港
H27秋		八幡製鉄所, 河内ダム 遠賀川水源ポンプ場



軍艦島



三池炭鉱万田坑



東田高炉

「中国四国支部との共同開催」

	山口	愛媛
H27春	宇部	
H30春		新居浜



宇部2アジスパホテル



広瀬歴史記念館

「工場・施設見学」

九州支部発足当時、会員数5人以上の企業は三菱重工と新日鐵(当時)とTOTOの3社でした。この3社が幹事企業となり、順番に幹事を担当して来ました。見学した工場

や施設を次の表に示します。ここまでに紹介したものの他に八丁原地熱発電所、霧島国際ホテルや雲仙小浜の地熱発電所、九州国立博物館、TOTO歴史資料館、工場、TOTOミュージアム(2015年開設)、長崎歴史文化博物館、九州支部長の千々木亨さん(S54/1979卒)の職場がある北九州エコタウン、松本清張記念館、西日本旅客鉄道博多総合車両所、日本鑄鍛鋼、旭化成延岡工場、サントリー熊本工場、玄海原子力発電所、有田ポーセリンパーク、首里城、関門海峡ミュージアム等に行きました。

「工場・施設見学」

幹事	三菱	日鉄	TOTO
H16秋	長崎造船所史料館		
H17秋	八丁原地熱発電所		
H18秋		八幡製鉄所	
H19春秋	九州国立博物館		TOTO歴史資料館
H20春秋	霧島国際ホテル 地熱発電所 長崎歴史文化博物館		
H21秋		北九州エコタウン	
H22春秋	一支国博物館		TOTO小倉工場 松本清張記念館
H23春	種子島宇宙センター		
H24春秋	長崎造船所	西日本旅客鉄道	
H25春秋		三池炭鉱	TOTO ファインセラミックス
H26春秋	小浜温泉地熱発電所	釜山国際コンテナターミナル	
H27春秋		宇部興産石灰石鉱山 日本鑄鍛鋼	
H28春秋		旭化成延岡工場	TOTOミュージアム
H29春秋	長崎造船所史料館	サントリー熊本工場	
H30春秋		広瀬歴史記念館 住友重機械 別子銅山 玄海原子力発電所 有田ポーセリンパーク	
R1春秋		JTAメンテナンスセンター 首里城	TOTOミュージアム 門司港駅 関門海峡ミュージアム
R2			
R3秋		北九州エコタウン	

「出前授業」

最後は、九州支部の特色ともいえる「出前授業」です。同窓会も世間から尊敬されるようにと京機会本部で社会貢献のための予算がつけられました。平成26(2014)年に初めて「出前授業」をしました。行き先は筆者がSSH(スーパーサイエンスハイスクール)で講義をしたことがある長崎県立諫早高校です。翌年は京機会元会長の川口東白さん(S34/1959卒)と大熊隆吉さん(S35/1960卒)の母校である福岡県立小倉高校に行きました。次の年は千々木さんのお嬢さんの母校の明治学園中高等学校、次の年は長友志朗さん(H11/1999卒)の息子さんが通っている長崎精道三川台小学校に行きました。平成30(2018)年は中村久志さん(S56/1981卒)の母校の福岡県立修猷館高校、翌年は黒瀬良一教授(H5/1993卒)の母校の福岡県立東筑高校に行きました。この両校への「出前授業」はその後も継続しています。

「出前授業」

	長崎	福岡
H26	県立諫早高校	
H27		県立小倉高校
H28		明治学園中高等学校
H29	長崎精道三川台小学校	
H30		県立修猷館高校
R1		県立東筑高校
R2		県立修猷館高校
R3		県立東筑高校 県立修猷館高校



わたしたちの研究 (10) ナノ・マイクロシステム工学研究室

土屋智由 (H3/1991卒)



1. 自己紹介

生まれは神奈川県横浜市です。横浜いいですね、と言われ、金沢区でふつうの町ですよという、八景島とかあっていいところですよと返されます。東大の理1から精密機械工学科に進み、研究室は須賀唯知先生の研究室に入りました。須賀先生は表面活性化常温接合の研究で知られていますが、私は3年先輩の伊藤寿造さん（現在東大精密機械工学教授）とともに原子間力顕微鏡（AFM）の自己検出型微小力センサをテーマとしました。当時は1986年にノーベル賞が授与されたAFMも面白そうでしたし、半導体全盛期だったので微細加工でセンサを製作するという研究が興味を引きました（実はちょっと違い、これを話すとまた長くなるので、そういうことにしておきます）。まだ、大学には微細加工の設備などはなかったの、研究室に入ったとたんに週3回、国分寺にある日立製作所の中央研究所に通うことになりました。ここから修士の途中まで約2年間通い、微細加工技術を一から学びました。図1は卒論で製作したZnOを用いた圧電薄膜自己検出型微小力センサです。修論では圧電膜にチタン酸ジルコン酸鉛（PZT）圧電膜を用いることになり（成膜装置もなかったの）ゾルゲル法での成膜プロセスを検討していました。成膜だけでなく物性の測定、センサだけでなくアクチュエータの応用などほとんどすべて自分で立ち上げて研究を進めていました。この時の経験が今でも役に立っています。



図1 圧電薄膜自己検出型微小力センサ

博士前期（修士）課程修了後、[株式会社豊田中央研究所](#)に就職しました。きっかけは須賀先生が主宰されていた研究会で副所長の五十嵐伊勢美さんとお会いし、その研究と人柄に惹かれ、豊田中研って面白そうと思ったこと。また、長距離通学に疲れて首都圏を離れたくなったこともあります。約11年勤めましたが後述する微小電気機械システム（MEMS）センサ、アクチュエータの研究とマイクロスケールの材料の機械特性評価の研究を中心にしていました。途中、株主会社の製品開発への協力や新規テーマの開拓なども実施、社内ベンチャーの提案もしました。1999年から3年間、国内留学の制度を使い名古屋大学大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻で社会人博士課程に入り、学位を取得しました。指導教員は[佐藤一雄](#)先生です。佐藤先生は日立製作所のご出身で私が学生の時に通っていた部署のリーダーだったという縁で指導いただきました。

そして、2004年3月に京都大学に機械工学専攻の助教授として採用されました。きっかけは当分野の前任の教授である[田畑修](#)先生（現京都先端科学大学工学部長）に声をかけていただいたのですが、その田畑先生は豊田中研に私が就職した時の最初の直属の上司でした。声がかかるまではまさか京大にお世話になるとは全く想像もしていなかったので採用がほぼ決まった2004年1月に吉田キャンパスを訪れるまで一度も京都大学のキャンパスに来たことがありませんでした。2019年9月にマイクロエンジニアリング専攻構造材料強度学講座の教授に昇任し、2020年2月に現分野に配置換えされました。京大機械系にお世話になってもうすぐ18年になります。

教授になるとともに京都大学の微細加工設備の共用施設である学際融合教育研究推進センター・[ナノテクノロジーハブ拠点ユニット](#)のユニット長も務めています。ナノ・マイクロ加工の設備を学内外に広く共用している施設です。装置導入から関わらせていただき、10年経ちました。宣伝になりますが最先端の装置と優秀なスタッフで幅広い分野でニーズが高まるデバイスの作製、ナノ材料の創製、加工の支援をしておりますので、ぜひご利用ください。

2. ナノ・マイクロシステム工学分野

当分野は1994年の大学院重点化改組時に機械工学専攻に機械設計制御工学講座マイクロマシン分野として新設され、2005年の改組時にマイクロエンジニアリング専攻ナノシステム創製工学講座ナノ・マイクロシステム工学分野となり、現

在に至ります。教授は1996年より鷲津正夫先生が6年間、2003年から田畑修先生が18年間在籍しておられました。現在の教員は教授の土屋、昨年（2021年）12月に着任した准教授の廣谷潤先生、外国人教員の講師、Amit Banerjee先生の3名です。今カバーしようとしている研究テーマを図2に示しました。廣谷先生は九州大学の高橋厚史先生の研究室でカーボンナノチューブの熱物性測定で学位を取得し、その後名古屋大学で助教を務め、フレキシブルトランジスタの研究を大野雄高先生の研究室で行い、最近では2次元材料を用いた熱流束の制御デバイスの提案をしています。Amit Banerjee先生はインド工科大学カンプール校で集束イオンビーム（FIB）加工で製作したナノ振動子の研究で学位を取得し、香港城市大学でダイヤモンドナノ構造の強度評価の研究を行ったのちに、現在ではナノ共振子の研究、ガスセンサへの応用を行っています。詳しくは研究室のウェブサイトをご覧ください。以下は土屋の研究紹介というよりは雑感に近いところです。

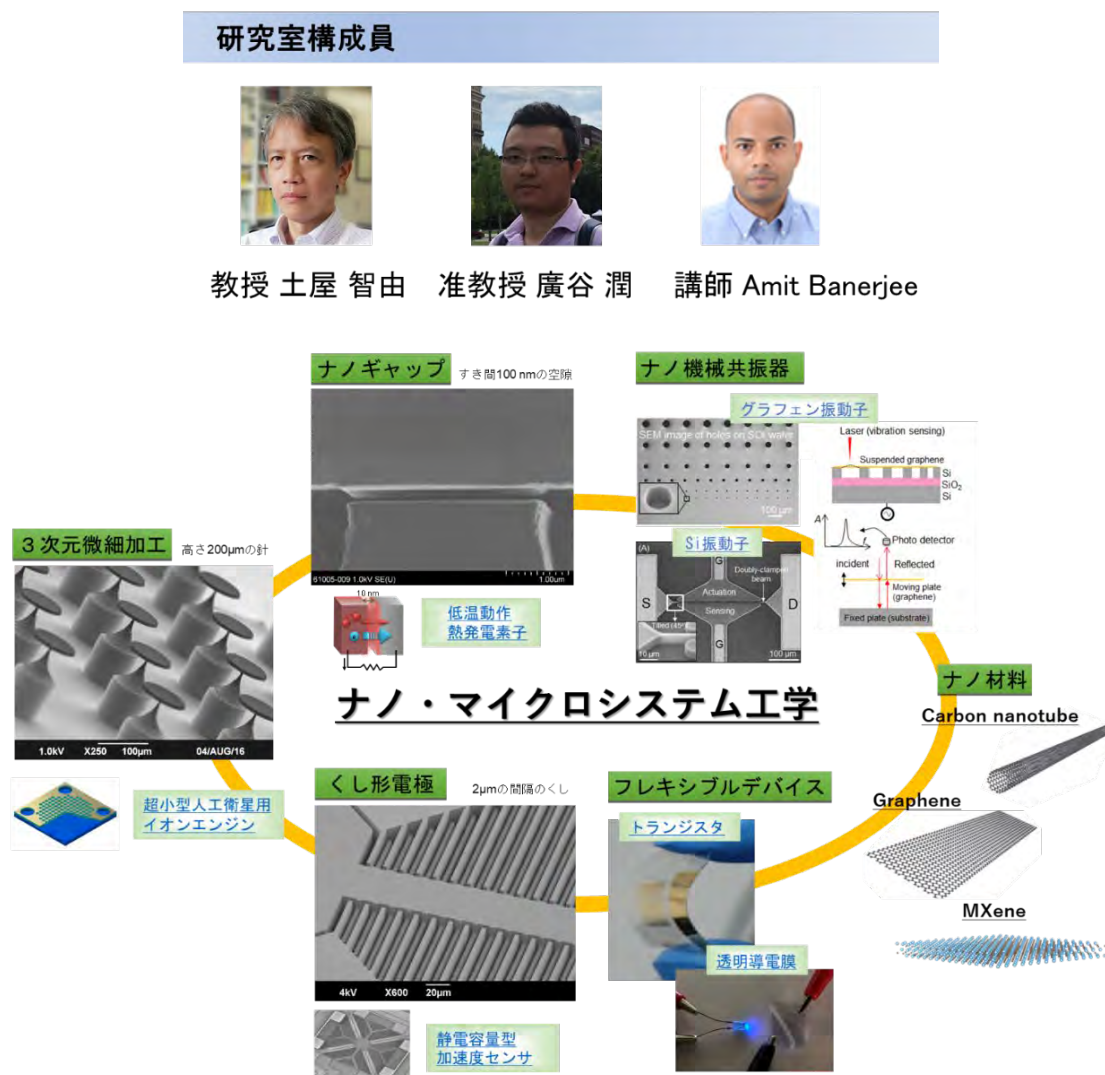


図2 ナノ・マイクロシステム工学分野

3. MEMS

MEMSとはひらたく言えば微小な機械システムなので、電氣的な入出力があつて機械的な要素が何かあつたらなんでも含まれるという認識でよいと思いますが、1990年代に米国政府機関の出資で設置された機関World Technology Evaluation Centerが1994年に実施した“Microelectromechanical Systems in Japan”の[調査報告書](#)の定義が一文ですべての要件を表し、私の感覚では最もフィットしています。

"MEMS" means batch-fabricated miniature devices that convert physical parameters to or from electrical signals and that depend on mechanical structures or parameters in important ways for their operation.

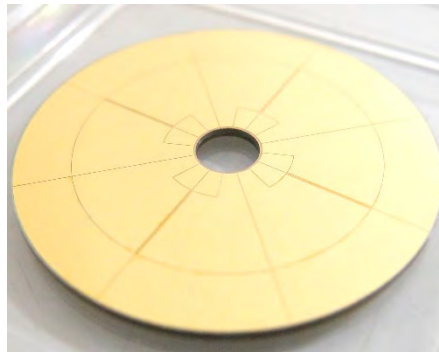
- ・ 小さな素子
- ・ 一括加工 (batch fabrication) (≒半導体微細加工) によって製作
- ・ 電気信号を入出力し、これを物理量に (いずれかの方向に) 変換
- ・ 機械構造や機械量がその動作原理

小さいということで特に製作技術がいわゆる機械とは異なり、別扱いされていますが本質は機械システムであり、マイクロ・ナノスケールでの機械工学の理解が求められています。

その代表例が各種センサです。特に、角速度センサである振動型ジャイロ스코ープ (以下ジャイロ) は常時一定振動する振動子に作用するコリオリ力を検出する精緻な機械システムであり、その加工、動作、制御に機械工学の知識を広範に、また深く理解していることが必要です。近年では自動運転車への適用を目指して、バイアス安定性が0.1~1°/hrであることが要求されています。地球の自転速度が15°/hrであることを考えるとその精度がわかると思います。さて、ジャイロを振動の制御として考えると今そのセンサの機械構造に求められている精度としては考えられないほどに高いものになっています。つまり、一定振動の振幅に対して、コリオリ力で発生する振動の振幅はフルスケールでその1000分の1以下であり、上記のバイアス安定性を実現するには100万分の1以下の振動、pm以下の振幅を制御しなければならないとされています。

私は車載用の低コストでほどほどの精度が要求される[ジャイロの研究](#)からスタートして、現在では高価格ですが高精度が得られる光ジャイロと同程度の性能を車載応用適用なレベルでの価格で実現するための研究を行っています。ジャイロ

の性能の鍵は振動の安定性と出力の大きさです。これを高いQ値と高い電気機械結合係数を有する単結晶の圧電材料であるニオブ酸リチウムで実現する研究を企業との共同で進めています。単結晶材料は機械的損失が小さいことが期待されますが、一方でジャイロとしては振動特性の等方性が必要であるので材料特性の異方性が課題になります。そこで、最適な結晶方位を探索し、圧電定数、電気機械結合係数を大きくするための電極配置の工夫をして、[図3](#)に示すような[ディスク型の振動子を試作](#)しました。たった1枚のディスクですが、多自由度の振動子であり、圧電アクチュエータ、センサであり、電極配線が行われています。設計にはこれらすべてを考慮しながら、外部の回路、制御系の設計が必要であり、研究としてまた将来の応用デバイス開発として今なおとても面白い対象だと思って研究しています。



[図3](#) ニオブ酸リチウム単結晶を用いた圧電ディスク型ジャイロスコープ

4. シリコン

MEMSで構造材料といえばシリコンです。その優れた機械的特性（高い比弾性率、熱伝導率、低熱膨張率）は鉄鋼材料を凌駕するものです。ただ、脆性材料です。シリコンとても高い降伏応力を示しますが、降伏＝破壊であり、それはcatastrophicな現象です。自動車会社の研究所に務め、MEMSの研究をする立場ではこの問題を解決しなければ前に進めないことは明らかでした。そこでシリコンの機械的信頼性評価の研究をセンサ開発と同時にすることになりました。引張試験や疲労試験の手法開発から、強度、信頼性データの解析までこれも幅広く行いました。やってしまえば当たり前ですが、[シリコンの破壊](#)はほとんどの場合で表面の加工粗さに支配されており、その加工粗さがばらつきを持つので統計的解析を行います。ですので、破壊は確率論で、絶対に壊れないとは言えないです。特に、疲労試験、つまり繰り返し荷重による強度低下、長期の信頼性をいかに保証

するか、そもそも疲労破壊のメカニズムはなどの疑問についてはいまだに答えを出すことができていません。十分に高い安全率を見込めば長い時間を動作させることは可能であるとの理解はされましたが、近年では過酷な環境で使用されるデバイスについてもシリコンの構造体を使いたいという要求も多いです。特にこれも自動運転車で注目されているLiDAR (light detection and ranging) に用いられる光スキャナは従来にない大きなひずみを構造に加えることとなります。そのような中で[シリコンの信頼性](#)向上の手段、またメカニズムを明らかにしたいと今でも考えています。

興味深いことに半導体微細加工で製作された単結晶シリコンの部品は今では腕時計のムーブメントの[ギヤ](#)、[がんぎ車](#)、[ひげゼンマイ](#)に用いられています。つまり数mmの機械部品に使うことはある範囲で可能であるということです。cm、mスケールの部品がシリコンで作られることは当面ないと思いますが、シリコンウエハから一括で多数得られる寸法での機械部品としての応用はまだまだ広がると期待し、機械加工でシリコンインゴットからエンジンでも作れたら面白いなあと妄想しています。

5. これから

上記の研究は振り返ってみると豊田中研時代に始めてかれこれ30年近くやっていることとなります。様々な発見、理解がMEMSの幅広い応用に展開されればと祈りながら研究を進めています。その中で今行っている新たな展開として2つのテーマを紹介いたします。

一つは、MEMSを計測装置として用いることです。それってセンサのこと？と思われるかもしれませんが、そうです。ですが、物理量の測定ではなく、物理現象の測定に使いたいと思っています。大学に来てから、[ナノ材料の引張試験](#)というのをまず手掛けてきました。最近ではナノスケールの空間の物理現象を測定する実験をしています。数~100 nmくらいの隙間 ([図4](#)) を作って、熱、電子などのエネルギーキャリアの輸送を計測できたら面白いかなと思っています。ポイントは面積をなるべく大きくしたい、隙間は均一で極限まで小さくしたいということで、単結晶シリコンの梁を(111)面でへき開破壊してコンフォーマルなギャップを作り、この間隔をMEMSで制御しながら、温度、電流、力、変位などを測定して、[熱輸送の近接場効果](#)、[電子放出](#)、カシミール効果などを調べています。

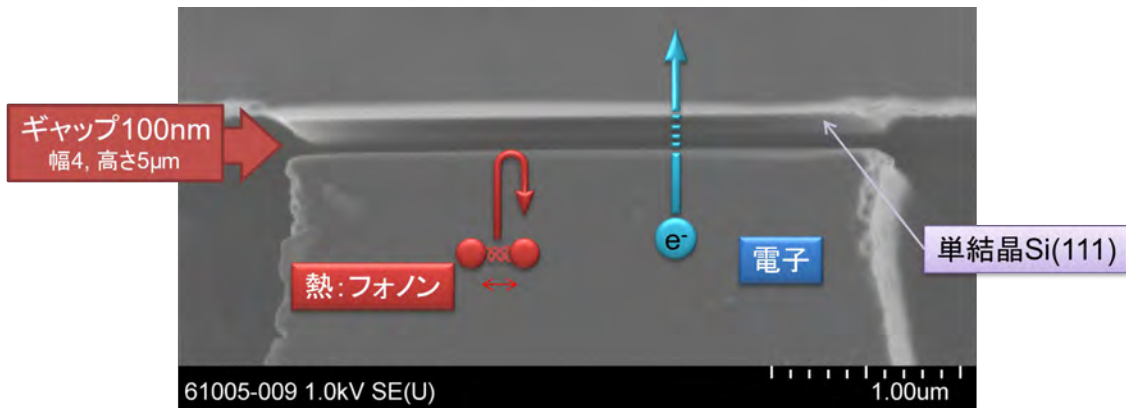


図4 単結晶シリコンのへき開により作製した大面積ナノギャップ

もう一つは機械学習です。いわゆる神経回路網（neural network; NN）をMEMSの機械構造で実現することをめざしています。NNの実装の一つとしてリザーバーコンピューティング（reservoir computing; RC）が注目されています。ここでは再帰型NNの中間層を様々な非線形物理現象で実装するもので、これを物理リザーバーと呼びます。物理リザーバーをMEMSで作製し、同時にセンサと一体化することができれば、物理量の検知だけでなく、認識や分析、さらにはこれらに基づく判断、行動までを機械構造のみで実現できる、実現したいというのが究極の目標です。現在は加速度センサを用いたMEMS-RCを試しているところです。これこそ真の機械システムかなと思ってしばらく頑張ってみたいと思っています。

6. 最後に

教授になり、研究室を主宰して2年が過ぎスタッフもそろいましたので、これから勝負だと思っています。スタッフそれぞれの強みを生かし合い、また、学内外の研究者との協力を進めながら我々にしかできない研究を進めていきたいと考えています。

わたしの仕事

(37) DMG森精機株式会社

廣野陽子 (H19/2007卒)



1. はじめに

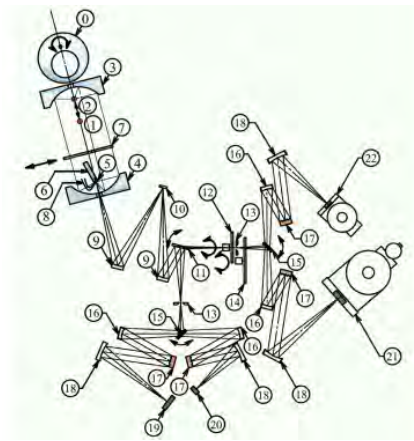
京機会会員の皆さま、明けましておめでとうございます。2007年に熱物理工学研究室（牧野研）を卒業、2009年に精密計測加工学研究室（松原研）を修了しました廣野陽子と申します。京機短信1月号という新春号に寄稿させていただきますこと、大変光栄かつ有難いことと存じます。京機会の「わたしの仕事」について、直近では同級生の投稿が相次ぎ、また、オンラインの新人歓迎会や総会、更には仕事関係でも同窓生にしばしば遭遇するようになり、懐かしさも相まった今、この節目での投稿に感慨深く筆を進めている次第でございます。

わたしは、大学3回生の授業で初めて旋盤の理論を学んだとき、この機械を考案した人は天才であると衝撃を受け、また、同学年での実習授業では、学生実習工場において初めて普通旋盤/手回し旋盤を回したときから、もう「工作機械」というものに心を奪われ、知れば知るほど好きになり、今に至ります。下手の横好きという視点で工作機械についてご紹介させていただきたく存じます。

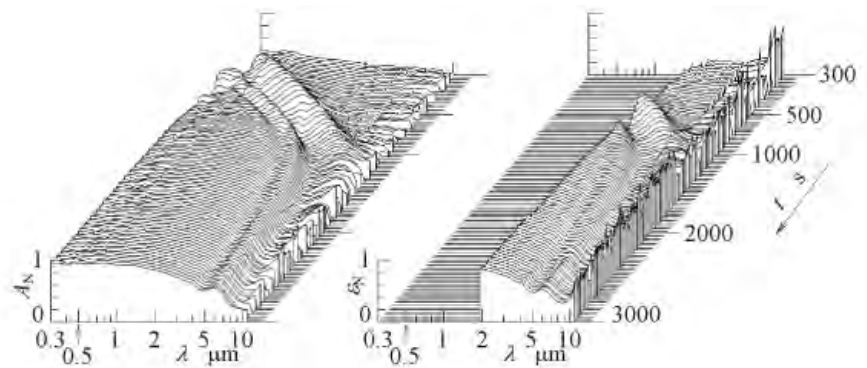
2. 大学・大学院での研究

大学3回生時、どの研究室に所属したいかという研究室見学に参加し、憧れの工作機械の研究室（精密計測加工学研究室、松原研）を訪れ、ぜひここへと心に決めたことが昨日のように思い出されます。4回生の研究室配属は大体がじゃんけんで決めるということで、それもまた一興と考え、負けたこともまた鮮明です。その後、当時の授業だったか何かの説明会だったかで、松久先生から、「B4/M1・2で異なる研究室に行った方が面白い」というお話を聞き、（当時の松久先生は、ここでは記載するのが憚られるほどの前衛的なご発言もあり、やはり京都大学に籍を置く者としては、それこそが我が出身校の良きところであり愛すべきところであると思ったものですが）じゃんけんで決まったということは、何か意味があることだったのではないかという気もしてきて、牧野研へ喜んで入りました。そこでは、C++を用いた分子動力学シミュレーションから実験まで幅広く学ぶこと

ができ、学士論文は「高温大気酸化過程にある金属表面の半球反射率と放射率のスペクトルの測定」というテーマに取り組ませていただきました。まず、黒体を作るというお題をいただき、どうすれば黒体になるかを考えた結果、ステンレス鋼にφ24mm程度の大きな穴を開け、φ1mmほどの穴が開いたふたをかぶせようとするに至りました。全反射を目指すためには内部の形状精度や表面粗さがランダムであればあるほどよいということで、慣れていない自分が加工することになり、あまりに下手すぎてモクモクとステンレス鋼から煙を上げながら大好きな旋盤で穴加工をしていました。この経験こそが、自分はどんくさすぎて旋盤工にはなれない、旋盤を設計する方がまだ向いているかもしれないと思った瞬間でした。



Experimental setup

Figure 5. Spectrum transition of absorptance A_N and emittance ϵ_N .

Ref: [New Spectrophotometer System for Measuring Thermal Radiation Characteristics of Real Surfaces of Thermal Engineering Entirely](#), T. Makino and W. Wakabayashi, *Journal of Thermal Science and Technology*

大学4回生での院試を経て、大学院からは夢にまでみた工作機械の研究室（精密計測加工学研究室、松原研）へ入ることができ、松原先生からお題をいただきました。「最近では2階の工場にも工作機械を設置するメーカーがあります。例えばタンクローリーが隣の道路を走ったとしましょう。どの程度、道路が振動し、建物に伝わり、工作機械に伝わり、製作される部品の精度に影響するのでしょうか？ 無視できる程度なのでしょうか？ 何か対策を打った方が良いでしょうか？」心が躍りました。なんと面白い。しかし、自分には考える術がない。どうすればよいのか。そこで、当時博士課程1回生、現在松原研で准教授をされている河野先生が何から考えれば良いかを教えてくださいました。研究室にはFFTアナライザがあり、ファンクションジェネレータがあり、工作機械があり、NC（数値制御）が

あり、それらでこういった実験を行えば何が得られるのか、基本的なことを教えてくださいととも、考えるヒントをいただきました。毎月、様々な企業の方へ発表させていただける機会もあり、そこで考え直すことも多々あり、だからこそ、自分などに工作機械という題材は務まるのか、社会に出てからも取り組んで良いのかという自問自答も始まりました。就職活動が始まり、当初は工作機械業界のみを希望しており、第一志望は当時の株式会社森精機、現DMG森精機株式会社でしたが、最後の方には自信を無くし、他の業界も多少見る（といっても、大学にOBが来られる際にお話を聞く程度でしたが）ようになりました。しかし、やはり他業界はじっくりこず、結局、三菱重工業株式会社様がニッチな工作機械開発を行っているを知り、どこよりも早く合格通知をいただけたという流れもあって入社を決めました。

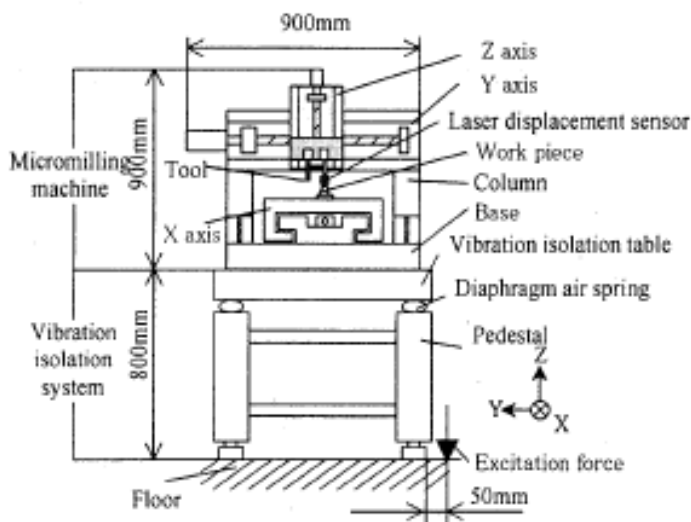


Fig.1 Experimental system

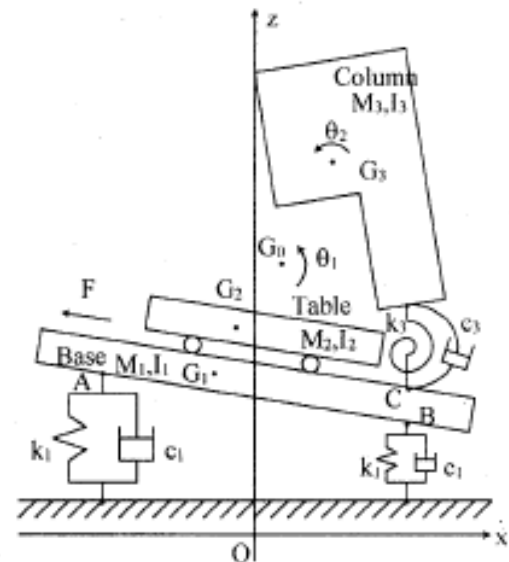


Fig.4 Rigid vibration and internal vibration model

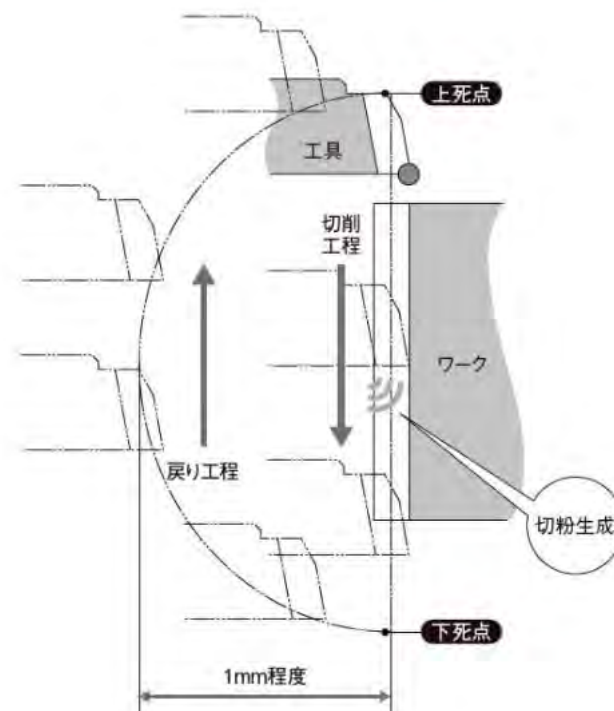
Ref. マイクロ切削加工機の振動解析（廣野、松原、廣岡）日本機械学会第7回生産加工・工作機械部門講演会

3. 三菱重工業株式会社での工作機械開発

3. 1 新入社員論文

三菱重工業株式会社の工作機械部門では、普通の旋盤やマシニングセンタではなく、歯車を加工する専門の歯車機械や、数mもの対象を加工する大型機などがありました。2009年の入社から2019年4月の平成最終月まで在籍し、様々な経験をさせていただきました。まず、有名なお話ですが、三菱重工グループでは、新入社員に「新入社員論文」というものを課します。これだけで仕事になるわけで

はないですが、1年を通して何でも良いので論理的に取り組み、その成果を論文にまとめよというものです。また、タグチメソッドなどの品質工学を使用した社員は、各事業部で優秀者を1名以下募り、最終的には本社で発表の上、当時の研究所所長からお褒めのお言葉をいただくというセレモニーもありました。わたしは、ギヤシェーパのリリービング干渉に取り組みました。歯車機械で最も有名なのはホブ盤ですが、2段ギヤ加工など、ホブが干渉する場合に用いられるのがギヤシェーパという機械です。下図のように、上から下へ動くときに加工を行い、下から上へ動き際には加工を行わずリリービングを行います。これがヘリカルギヤの場合、どのような経路で逃げなければ干渉するのか、しかし安全を見すぎると時間がかかる、などの理由で、リリービングをシミュレーションし、加工・非加工時間予測を精密に行うことが当時は難易度が高いものでした。精密に予測できても時間がかかり過ぎては意味が無く、現代のようなスペックのPCも少ない当時においては、いかに早くある程度当たるシミュレーションができるかがカギであり、ここにタグチメソッド2段階活用というオリジナリティも盛り込んで面白い新入社員論文を書くことができました。研究所所長からスカウトされ、工作機械以外には全く興味を持たないので、三菱重エグループの他の事業所には何の興味もありませんと丁寧にお断りしたのも今となっては失礼な限りであったと反省しています。



3. 2 北米自動車メーカー向けホブ盤開発とゲストエンジニア

2年目は開発した機械の検証担当、3年目は上市した機械のフィールドトラブル対応で国内を津々浦々し、4年目には国内自動車メーカーとの共同開発をメインで担当、5年目に北米自動車メーカー向けホブ盤開発を担当しました。

2~4年目にも面白いことはたくさんあったのですが、次に皆さまと集まった際にお酒のお供にするべく、ここでは割愛したいと存じます。

5年目からは安全規格やスペックの読み解き、週に一度のお客様とのwebミーティングを行っていました。webミーティングといっても、現在のそれとは異なり、顔を映すと回線が重くなるため、画面共有を行いながら電話をしているような状態でした。機械設計者ではありませんでしたが、取り纏め業務を行っていたため、自動搬送を行うメーカーとのインターフェース信号の確認なども行わなければならない、アジェンダの準備、話す内容のスクリプト準備、議事録の作成とお客様やサプライヤ様への確認など、英語が苦手であるからこそ行わなければならないことも多く、最初は非常に苦労しました。

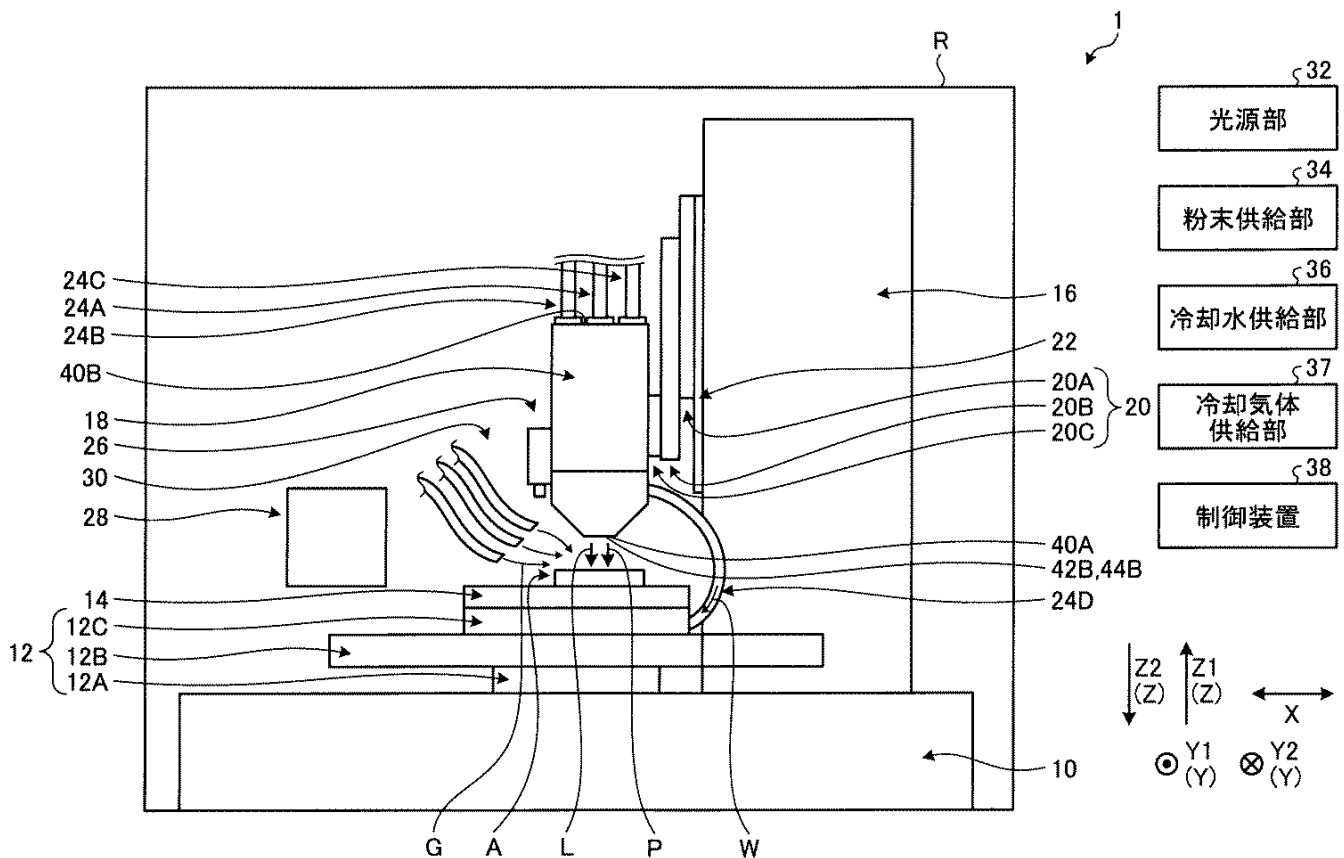
6年目には開発・設計・製造した機械を12台出荷し、7・8年目は米国の支社とお客様工場でゲストエンジニアとして勤務しました。アジア人は若く見えるため、最初は「アジアンリトルガール」とニックネームをつけられ、とくにデトロイトという昔気質の方々が多数いる土地柄もあり、ハンドリングが難しい部分もありました。しかし、わたしの判断に従ったことでうまくいく、楽になる、お金が稼げるなどのベネフィットを周囲が感じてくれるようになり、最後には何を言っても「イエス、ママ」と返してくれるようになりました。アメリカではP.E.（プロフェッショナルエンジニア）の地位が高く、地域や業界によってはPhDよりも評価が高いことあり、それを受け、わたしもP.E. Jp.（技術士）を取得しました。それも現地での成功に一役買ったのではないかと思います。また、1週間に1度は日本語を話したくなり、毎週土曜になると、日本人のマスターが経営する小さな居酒屋に通い詰めていました。そこには、1人で駐在する諸先輩方がたくさんいらっしゃり、1人で放り込まれたわたしを仲間のようによく扱ってくれ、ゴルフ場やカジノへ連れて行ってくださったり、高価なワインを飲ませていただいたり、歴史や経済をそれぞれの視点から語ってくれ、唯一無二の経験ができたと思います。



出張で飛行機に乗りすぎて航空会社から表彰され、ソムリエ田崎真也様と撮った写真

3. 3 Additive Manufacturing (AM、金属3Dプリンタ)

米国へ滞在している間に自分が主任になっていたり、会社が分社化されていたり、他メーカーの買収にあうのではという噂もあったりしましたが、とくに気にすることも無く、帰国後はお客様工場での経験を次の開発に生かそうと意気込んでいました。が、マーケティング部署のような新設部署へエースを集めると言われ、謎のまま参加、上司の不祥事で次なる部署へ1年未満で異動となりました。しかし、その部署こそが現在取り組んでいるAMを取り扱おうとしていた部署です。AMの技術的な説明については次章に譲りますが、今ではあれは運命的な出会いであったと思っています。AMを始めて1年3ヶ月、プロマネ兼唯一の機械設計担当である自分と電気ソフト設計担当である主人とで新製品を世に出し、特許を出願し、周囲からは家族経営の町工場と揶揄されていたのも良い思い出です。この分野は面白い、これからも取り組みたいと考えていたのですが、直属の部長に嫌われ、技術者生命を絶たれそうになっていたところを、松原研の1つ上の先輩に救われ、学生時代に第一志望であったDMG森精機株式会社へ転職する運びとなりました。



三次元積層装置及び三次元積層方法（特開2020-152946号公報）より

<https://astamuse.com/ja/published/JP/No/2020152946>

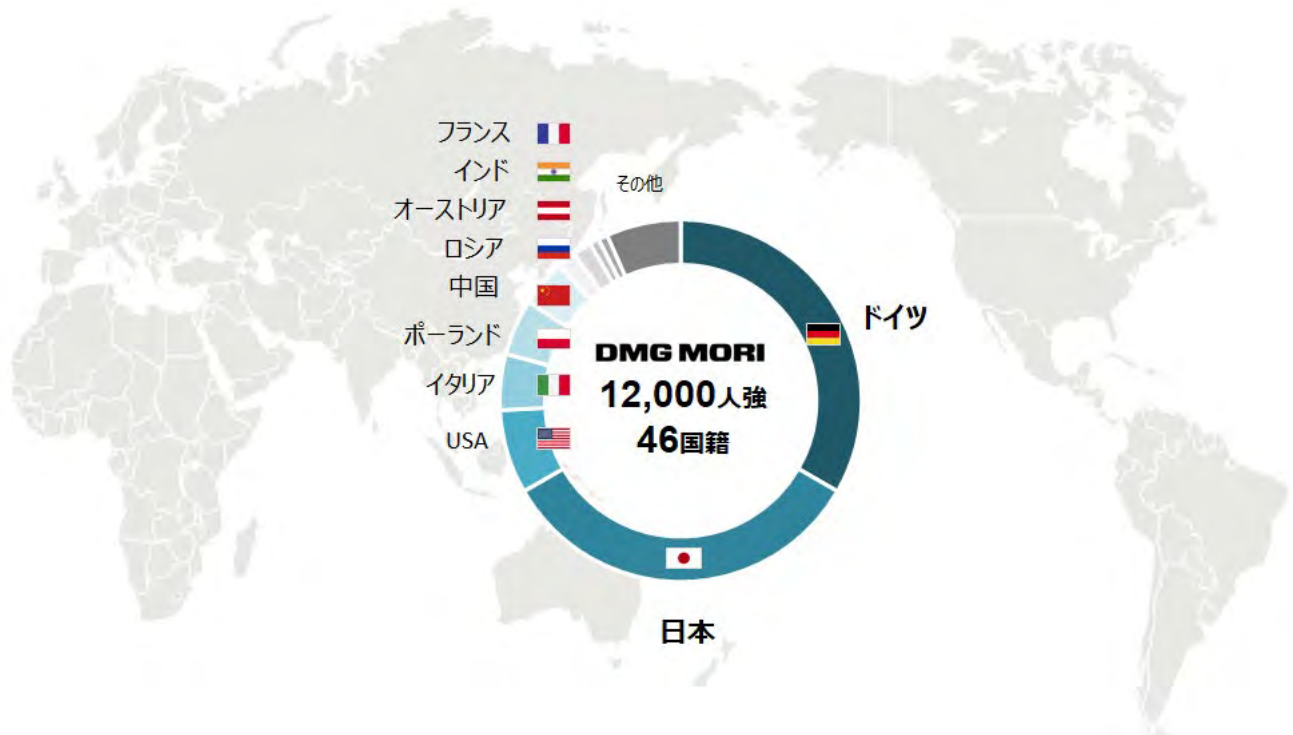
4. DMG森精機株式会社での開発

4. 1 DMG森精機株式会社と同社における開発

DMG森精機株式会社の事業内容は、工作機械（マシニングセンタ、数値制御装置付旋盤及びその他の製品）の製造、販売です。経営理念の1項目が最も分かりやすく端的に弊社の精神をあらわしていると考えため、記載します。

「わたしたちは、独創的で、精度良く、頑丈で、故障しない機械、自動化システム、デジタル技術を、最善のサービスとコストでお客様に供給することを通して、ターニングセンタ、マシニングセンタ、複合加工機、研削盤、加工オートメーションで、グローバルワンを目指す」

弊社は日本とドイツの会社が経営統合しており、社員の1/3が日本、1/3がドイツ、1/3がその他というグローバルな環境で仕事ができる面白い会社です。

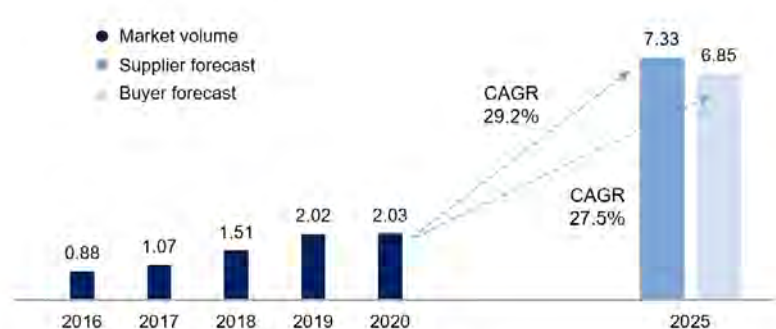


社員構成

4. 2 Additive Manufacturingとは

Additive Manufacturing（以下、AM）産業は1986年に初めて特許権利化されてから目覚ましい発展を遂げています[1]。その途上において人々の興味は、試作を早める目的であるラピッドプロトタイピングから、機能試作を行うファンクショナルプロトタイピングへと変化し[2]、新たな機能を付加する付加製造として、様々な業界に広まりました。Directed Energy Deposition（以下、DED）方式は、

航空宇宙産業での利用が期待されてきましたが[3][4]、昨今、そのアプリケーションは様々な分野に広がっています。たとえば、金型、ギヤ歯面、ベアリングシート、ロータリーダイ、カムシャフトなどへのhard facing（表面硬化、硬化肉盛）としての利用が挙げられます[5][6]。なかでも、DEDによる耐摩耗コーティング・クラディング、合金工具鋼などへのコーティングの要望が高まっています。これは、DEDが安価な母材の表面へ機能材料を付加することができるためであると考えます[7]。DEDの採用では図面をほとんど変更することなく、より安価に、より廃棄物を少なく、エネルギー消費量すなわちCO₂排出量を抑えられるという考えが一般的になり、そのハードルの低さからCAGR（Compound Average Growth Rate、年平均成長率）がAMの中で最も高いという下図[8]のマーケット予想に繋がっていると考えます。さらに、カーボンニュートラル、サーキュラーエコノミーも背中を押しています。令和3年版環境・循環型社会・生物多様性白書[9]によると、企業や金融機関においても、パリ協定を契機に、ESG（Environment・Social・Governance）金融の動きなどと相まって、脱炭素化を企業経営に取り込む動き（脱炭素経営）が世界的に進展しています。また、21世紀政策研究所研究主幹梅田氏の著書[10]では、サーキュラーエコノミーで今後起こりうることとして、ものづくりのありかたの変革、製品設計におけるライフサイクル思考などが挙げられています。これらの大目標につながる製造手法として、今DEDが正に注目されていると考えます。

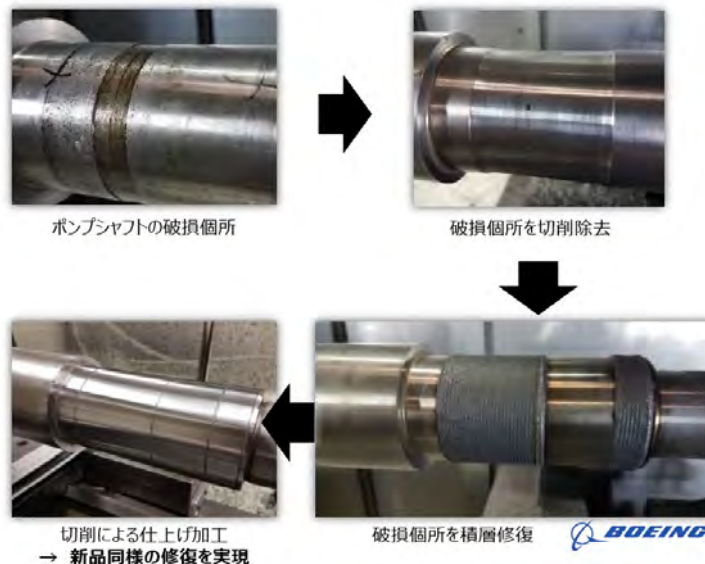


AM POWER REPORT 2021 Metal Additive Manufacturing より[8]

4. 3 DED方式AMのアプリケーション事例

下図に実際の生産工程での活用例を示します。America Makes TRX eventにてBoeing社が発表した内容ですが、同社は当社DED方式ハイブリッド機を活用し、

ポンプシャフトの修復を行っています。図に示すポンプシャフトの破損個所について切削除去し、積層により破損個所を修復、最後に切削により仕上げ加工を行い、新品同様の修復を実現しています。同社は、サステナブルな航空機製造をテーマにこの取り組みを行っており、カーボンニュートラルやサーキュラーエコノミーの考えが世界的に進む中、こういった取り組みは増加していくと推測できます。



4. 4 博士後期課程入学

もっと真面目にこの分野の技術に取り組むため、2021年10月に松原研の博士後期課程に入学しました。8月の入学試験は英語と口頭試問があり、これぞ京大という英語の試験、先生方の鋭いご質問をいただき、身の引き締まるような思いでした。10月からは授業や他の学生さんとのグループディスカッションがありますが、コロナ禍ということでオンラインが多く、何とか仕事との両立ができています。コロナ禍であることがマイナスであったことも多々あったと思うのですが、海外のお客様とのお打合せ回数も増えたり、国内外合わせて各月20件ほど外部の方々とお話しできたり、コロナ禍が助けになったこと、学べたこともたくさんあったと感じられる2021年でした。11月には第10回JSME先端生産技術に関する国際会議（LEM21）でまずは1つめの国際会議発表もさせていただきました。データも考察も不足していましたが、2022年はしっかり勉強し、データも取り、京大機械系らしく真面目に好きなことを楽しんで結果を出していきます。

4. 5 現在のわたしの仕事

金属3Dプリンタというと、時間をかけて何か複雑なものを製造する機械という

イメージでしたが、AMの中でもDED方式は、コーティング代用や焼入れ代用による工程集約、材料費削減、省エネ、カーボンニュートラルなど、いま製造業に求められる全てといっても過言ではないアイテムが含まれる機械というイメージが世界的に持たれるようになったと思います。量産に必要な機能を有したAM機開発を続けるだけでなく、アプリケーション開発やお客様との工程設計など、AMに関する全てに取り組み、お客様を通して社会への貢献をする、非常に抽象的ではありますが、これがわたしの現在の仕事です。

5. おわりに

ありきたりですが、工作機械はマザーマシン、製造業を支えていると言われます。わたしは、工作機械の最も面白いところは、その商品を購入した人がそれを使い、稼ぎ、生活を生み出すことだと思っています。日本は賃金上昇率が低迷しています。豊かさとは何なのか、全世界の各地域で、そのタイミングで、それぞれ異なります。しかし、人が服を着る限り、食事を摂る限り、工作機械は必要です。人生を豊かにするための工作機械とは何なのか、考えながら走り続けたいと思います。

松原先生、河野先生、これからもご指導のほどよろしく願いいたします。吉田先生、今回はお声がけいただき誠にありがとうございます。段さん、これからも一緒に京機会イベント盛り上げられればと思います。

末筆になりますが、京机会の皆様のご多幸とご健勝をお祈りいたします。

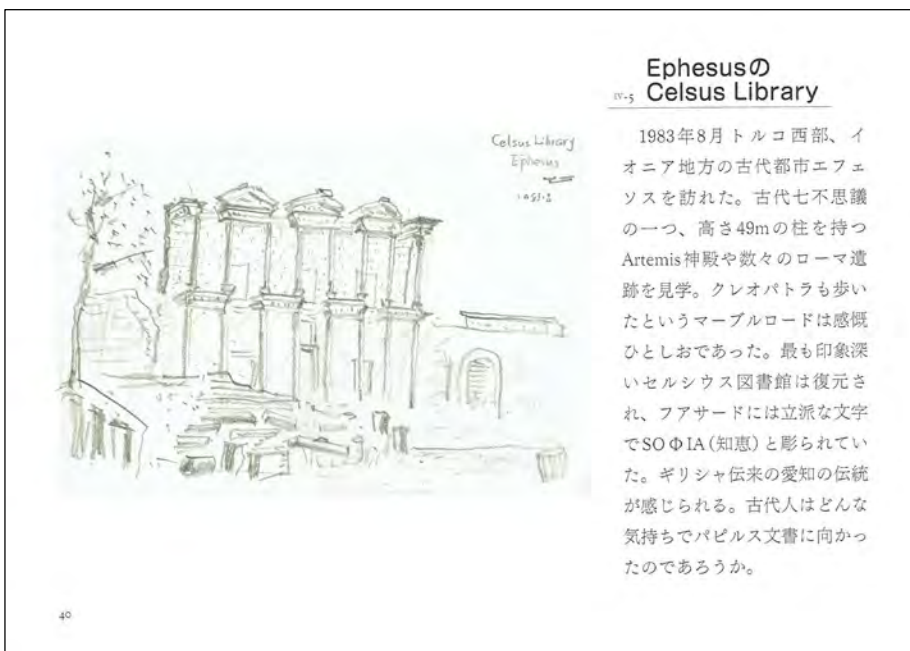
- [1] Hull, C.W., Apparatus for Production of Three-Dimensional Objects by Stereo Lithography, United States Patent, US 4575330, 1986.
- [2] Tofail, S.A.M., Koumoulos, E.P., Bandyopadhyay, A., Bose, S., O'Donoghue, L. and Charitidis, C., 2018, Additive Manufacturing: Scientific and Technological Challenges, Market Uptake and Opportunities, Materials Today, Vol. 21, 1, pp. 22-37.
- [3] Kuriya, T., Koike, R., Mori, T. and Kakinuma, Y., 2018, Relationship between Solidification Time and Porosity with Directed Energy Deposition of Inconel 718, J. Adv. Mech. Des. Syst. Manuf., Vol.12, No.5, pp. 1-11.
- [4] Liu, R., Wang, Z., Sparks, T., Liou, F. and Newkirk, J., 2017, Aerospace Applications of Laser Additive Manufacturing, Laser Additive Manufacturing Materials, Design, Technologies, and Applications, pp.351-371.
- [5] Tuominen, J., Kaubisch, M., Thieme, S., Nakki, J., Nowotny, S., Vuoristo, P., 2019, Laser Strip Cladding for Large Area Metal Deposition, Additive Manufacturing, Vol.27, pp.208-216.
- [6] Cecchel, S., Ferrario, D., Mondini, C., Montani, M. and Previtali, B., 2019, Application of Laser Metal Deposition for a New Model of Assembled Camshaft, J. Mater. Eng. Perform. Vol.28, pp.7756-7767.
- [7] Cracking Suppression by Substrate Preheating Using Induction Heater in Directed Energy Deposition, Yoko HIRONO, Takanori MORI and Daisuke KONO
- [8] AM POWER REPORT 2021 Metal Additive Manufacturing
- [9] 令和3年版 環境・循環型社会・生物多様性白書
- [10] サーキュラーエコノミー 梅田靖 著



Yazilikaya
トルコのヒッタイトの遺跡

2006年8月アンカラのアナトリア文明博物館で大村幸弘先生のご指導を受け、待望のヒッタイトの都ハットウシヤ(現 ボグズキョイ)を訪れた。市壁に囲まれた丘の上の堅固な要塞。王宮などがあり、図書館より多数の粘土板文書が出土した。眺望良くライオン門や王の像が残る。ヤジリカヤ至聖所には神々の行列の像が並んでいた。

オリエントでは珍しい印欧語族で多数の楔形文字板と象形文字板を残した。独のWinklerの努力で1917年に解読された。エジプトと関係が深く、有名なカデシュの戦いの平和条約文書が出土した。馬・鉄器・チャリオットを有する優勢な民族であった。前14～13世紀小アジアを中心とした大帝國を建設したが、前12世紀海の民に圧倒された。初めて鉄を作った。



iv-5
Ephesusの
Celsus Library

1983年8月トルコ西部、イオニア地方の古代都市エフェソスを訪れた。古代七不思議の一つ、高さ49mの柱を持つArtemis神殿や数々のローマ遺跡を見学。クレオパトラも歩いたという大理石ロードは感慨ひとしおであった。最も印象深いセルシウス図書館は復元され、ファサードには立派な文字でΣΟΦΙΑ(知恵)と彫られていた。ギリシャ伝来の愛知の伝統が感じられる。古代人はどんな気持ちでパピルス文書に向かったのであろうか。



iv-6
Wadi Rum(ラムの酒れ谷)

漠地に巨岩がそそり立つ。熱砂にペトピンの黒い幕舎が唯一。アラビアのロレンスの紅い谷である。



Jupiter Temple
Baalbeck
2006.3.17. 15

IV-7 Baalbeck 神殿

レバノン山脈の高地、パールベック3神殿のうちJupiter神殿が最も印象的。孤高の円柱烈風に立つ。

凱神廟のバル神殿と空の
パルミラ。シリア
1537.3.18 4:45 pm. 百段と塔
17冊



IV-8 Palmira

ゼノビア女王が君臨したパルミラ。ローマとペルシャの間であって交易の利で栄えた。列柱より見る
バル神殿は薄暮にバラ色に染まっていた。



St. Katherina
562.12.31
6:30
15

IV-9 St. Katherina山 2637m

HOTEL
INTER-CONTINENTAL
Jerusalem
TEL. 282551
TELEX 25285
TELEFAX 285384



シナイ山
2006.12.31
17冊

シナイ半島南部に聳える聖カテリーナ山の日の出を拝する為、午前3時に麓の宿を出発。足元を懐中電灯で照らして山道を登る。急坂で気が切れる。頂上付近は冠雪し寒い。岩かげで熱いチャイを飲み待つ。東天がバラ色に染まり、日の出を迎え歓喜の声が上がる。

下りは速い。麓の修道院に立ちよる。イスラムの地にキリスト教会、堅固な造り。修道士の遺骨累々。イコンは有名。

帰途大型サーキア群に出会った。やはり水が重要であった。

オハイオとビル・ローズ君の思い出

天野 到 (S40/1965卒)

2021年8月の京機短信で並木宏徳様によって、私（ペンネーム、森口透）の著書「北オハイオの冷たい風」を紹介して頂きました。あの作品に書かれた時から4年ほど経って、私はオハイオ州のアクロン近郊に(株)神戸製鋼所が設立した子会社に出向し、3年あまり勤務しました。最近、その時に仕事仲間（部下）としてとてもよく働いてくれたアメリカ人の男性の訃報が入りましたので、改めて人の世の無常など色々と考える機会となりました。そこで、彼とオハイオの思い出をエッセイに書いてみました。京機会会員各位とも、仕事や今まで会った人々について沢山の思い出があると思います。80歳を前にした元産業機械設計技術者の思い出の記録としてお読み頂ければ幸いです。

ある友人からのメールでビル・ローズ君の訃報が知らされた。彼は私より17歳ほど若かったはずなので、悲しみとともに人生の無常を強く感じた。

私は1989年5月から三年あまり米国のオハイオ州で過ごした。勤務していた(株)神戸製鋼所がオハイオ州アクロン市近郊に設立した子会社、B社に出向したのだ。アクロンは米国ゴム・タイヤ産業の中心地で、B社はアクロンとクリーブランドの中間の町にあり、幾つかのタイヤ会社の本社があるアクロン市まで車で30分ほどかかった。

B社での私の最初の仕事は、神戸製鋼所が製造販売するタイヤ加硫機をB社で製造するために必要な技術者を採用することだった。ビル君は最初に採用した3人の中の一人である。彼は当時30歳で頭が良く、仕事ができる高卒の設計技術者だった。採用後すぐ、彼が地元のオハイオ州立アクロン大学の夜間部で学びたいと思っていることを知り、B社が授業料を援助することにした。B社を支える人材として長く勤務して欲しかったからである。

ビル君は笑顔を絶やさない性格で、すぐにB社内で人気者になった。当時まだCADは黎明期で、B社では機械設計図の作成には製図版とドラフターを使っていた。ビル君は特に設計製図の能力に秀でており、すぐにB社の設計部でなくてはならない人材になった。当時、神戸製鋼所には優秀な設計製図者がいたが、神戸製鋼にいてもビル君は最も優れた設計製図者の一人だったと思う。

私が3年間無事にB社で仕事をする事ができたのは、ビル君がいてくれたお陰である。例えば、B社在任中、米国の大手タイヤメーカーから超大型のブラダープレスを受注し、納入したことがあった。オーストラリアなどの露天掘り鉱山から鉄鉱石や石炭を港に運ぶための超大型トラック用の外径が5メートルもある大型タイヤの加硫に使うブラダーを加硫するプレスで、締め付け力が3000トンで売価は邦貨で3億円もした。客先の工場の高さに制限があったので、新しいメカニズム

の採用が必要で完全に新開発だった。私は開発設計そのものには十分な自信があったが、正直言って、B社の経験の少ない設計者ばかりで必要な図面作成ができるか少し心配だった。しかしながら、結果として、私たちはその巨大なブラダープレスの設計と製作に成功し、無事にアイオワ州デモインの客先に納入することができた。私も自ら強度計算や重要部の図面作成に携わったが、この成功はビル君が設計技術者として予想以上に活躍してくれたお陰だったと思っている。

3年間、私は単身赴任だったので、生活をする上で現地の方々にお世話になった。Y夫人など現地在住の何人かの日本人、ピザ屋のイタリア人家族、クリーニング屋の中国人一家など親切で優しい人達には時おり何かとお世話になった。今も、彼ら彼女らに感謝の念で一杯である。あの時私は、人は一人では生きられないと身をもって感じたものだ。

生活の面でも、ビル君には度々助けてもらった。例を一つ挙げる。ある日私は疲労で寝込んでしまった。風邪もひいたようで、休暇を取ってアパートでベッドに寝て休むことにした。ところが、その日の午後、ビル君が食料などを持って私のアパートに来てくれた。そして、「テッド、これ以上悪くならないように医者に行きましょう」と言って、アクロン市のモール内にある内科医に連れて行ってくれた。当時、私はアメリカ人からテッドと呼ばれていたのだ。

あの時、彼が来てくれて、本当に心強かった。「単身赴任ですか？ 無理してはいけませんよ」と言って薬を処方してくれた医者が、小柄で金髪のとても優しい中年の女性だったこととともに、今も忘れられない思い出になっている。

私は約3年間B社に勤務した後、神戸に帰任した。B社のアメリカ人仲間たちは、最後の日に送別のパーティーを開いてくれた。ビル君は自分の名前入りの小さなプレゼントを私にくれながら、「僕のこと、決して忘れないでくださいよ、テッド」と言ったので、私は「色々本当にありがとう、ビル。君のこと忘れる訳はないよ」と言って別れた。

帰国後もビル君とは時に手紙やファックスで連絡を取り合っていたが、何年かして、彼はスカウトされて世界最大のタイヤメーカーであるグッドイアー社に転職した。B社を去ったことは残念ではあったが、さらに大きく活躍できるので、私は彼の転職を祝した。

ビル君はグッドイアー社で活躍するとともに、その後もB社の古い仲間との付き合いも大切にしたらしい。B社の年末のクリスマスパーティーには何とか都合

を付けて毎回のように参加した、と私は聞いている。

やがて時は過ぎ、主に私の怠慢が理由で、ビル君との交流がなくなった。そして、20年近く、ビル君の消息を耳にすることは殆どなくなっていった。

そして、本当に久しぶりに私に届いたメールがビル君の訃報である。メールには、ビル君の死亡を報道する Akron Beacon Journal の記事が添付されていた。Akron Beacon Journal はオハイオ州アクロンの地方新聞である。

米国の地方新聞にはかなりのスペースの死亡記事欄がある。日本の新聞と違って、有名人だけでなく一般市民の死亡通知が掲載されるようだ。それは単なる死亡記事ではなく、人によっては何行かに亘ってその人の功績、人柄などが記載される。

Akron Beacon Journal に載ったビル君の死亡記事は「9月26日、ビル・ローズはこの地球から飛び立って行った。」で始まる、500語もある以下のような記事だ。記事は、彼が家族や友人たちからどれほど尊敬され愛されていたかを記す文章で溢れている。

Bill Rose



On Saturday, September 26, Bill Rose "flew away," and left this earth. While his family is deeply saddened by his loss, we would like to share the pieces of Bill's spirit that we will carry always: Bill was a great father. He cherished his two biological sons, Nick and Seth, but acquired many others throughout his life whom he loved as well. Bill was a fantastic husband and partner. He comprised one half of what he and his wife Karen called "Team TBill" While Bill and Karen worked well as individuals, they were always best as a partnership. Bill was a devoted son to his

mother, Rosie and a loving brother to his sister, Wanda. He was adored by all of his extended family, especially his nieces, their families, and his sister and brother-in-law. Bill was exceptionally kind and generous. He was a man who would literally give you the shirt off his back, then apologize to you if it didn't fit. Bill was an outstanding friend. He made friends with anyone, anywhere, no matter the situation. From his childhood with the Tudor street gang through his adulthood, Bill continued to make friends across the globe the rest of his life. Bill was intelligent and hard working. He was a world-renowned engineer in his industry who valued his work relationships and friends. Bill was fun-loving. He worked hard, but he played hard too. He loved spending every possible moment with the people he loved. He

enjoyed good food, cheap beer, and dry red wine, often all at the same time. He delighted and despaired in watching his beloved Cleveland Browns. He loved music, mostly 80's hair metal, blues guitar, or any band his son happened to be working for. He enjoyed working backstage for the Wolf Creek Players, and travelling anywhere with his family. Bill Rose inspired so many to be the best versions of themselves. He demonstrated kindness, compassion, strength, patience, and determination. If there were one phrase that captured Bill's legacy, it would be: Do good, be kind. In other words, be like Bill Rose. While we can't have the in person memorial he deserves due to Covid, his family will be hosting a virtual toast to Bill on October 24 at 5:00 p.m. Eastern time. He would appreciate that. If you have a toast, a memory, a life lesson, or a story to contribute, we would be so happy if you could share it with us in a video, written message, audio recording, or picture. We will compile these into a video and raise a glass for Bill together. If you choose to send an audio or video recording, please try to limit them to 20-30 seconds, and send all messages by October 15 to toastforbillrose@gmail.com. In lieu of flowers, the Rose family asks that you consider making a donation to the Wolf Creek Players Bill Rose Memorial Scholarship fund. Checks can be mailed to: P.O. Box 1097, Norton, OH 44203. Arrangements have been entrusted to Adams Mason Funeral Home, (330) 535-9186.

14年前、私は40年余りのサラリーマン人生を終えた。機械技術者として神戸製鋼所に30年余り勤めた後、大阪の米国総領事館に政治経済専門官として約10年間勤務した。米国総領事館を退任した時、40年余りのサラリーマン時代に受け取った名刺を整理してみると、まだ2000枚以上を保管していて、およそ三分の一は外国人の名刺だった。

全ての名刺に目を通してみると、大変驚いたことに、大半の人は顔や声など何かを覚えていたのだ。私は人間の記憶の不思議さを思った。

80年近い人生では名刺を交換した人たちを含めて、非常に多くの人に会っている。私は今、人に出会い別れるのが人生だと、さえ感じている。

今までに会った人たちの中には、とても懐かしくて、できればもう一度会ってみたいと思う人が何人もいる。しかし、白状すると、ごく少数だが、思い出しても二度と会いたくない人もいる。

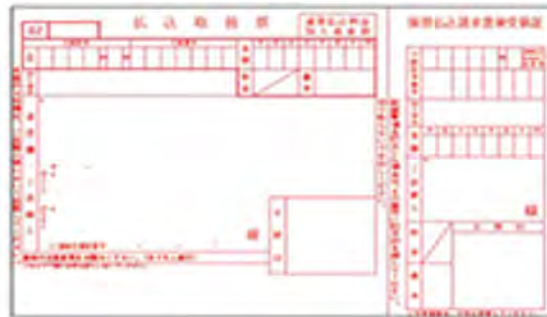
ビル君は、思い出す度に心が洗われるような思い出を残してくれた人物である。今の私は、ビル君の冥福を心より祈っている。

＜京機会からのお知らせ＞

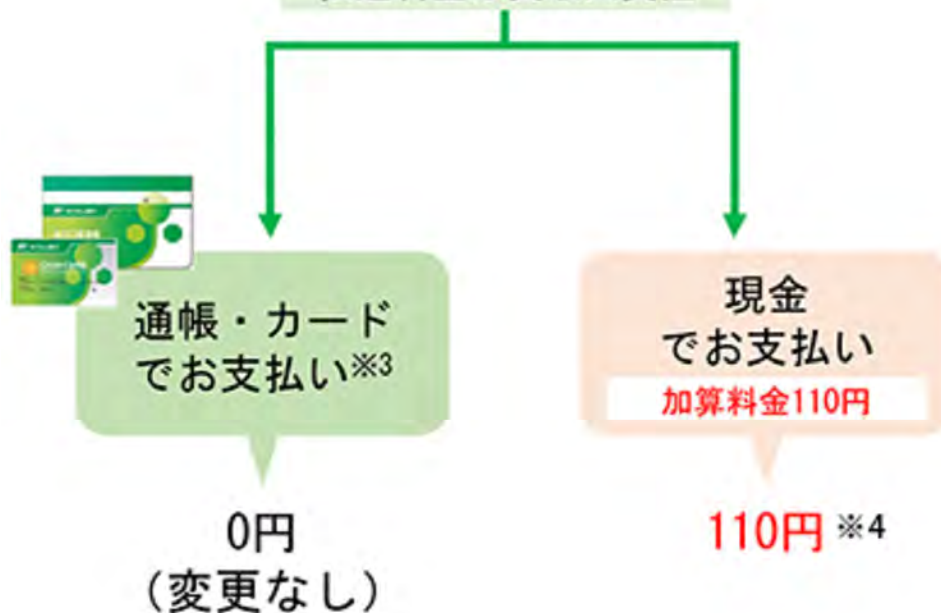
【1】郵便振替での年会費入金時の注意

ゆうちょ銀行規定により、2022年1月17日(月)以降は、払込取扱票を使って京機会会費(年会費3,000円)を郵便局窓口から現金でご入金の際は、料金受取人払の払込取扱票(赤色)をご利用いただいても、払込者に対し現金110円が徴収されますので、ご注意ください。

料金受取人負担の 払込取扱票をお持ちの場合



払込料金は受取人負担



https://www.jp-bank.japanpost.jp/news/2021/news_id001686_01.html より

年会費のご納付に関しては、最近の皆様インターネットバンキングも多くご利用いただいております。詳しくは下記サイトを確認ください。

<https://keikikai.jp/member/kaihi/>

【2】Zoom運用について

京機会ではZoomのビジネスライセンスを取得しこれまで本部や支部のイベントに利用してきましたが、この度、このライセンスを学年会や研究室等の会員の親睦にも役立てていただくことにしました。

ご希望があれば、Zoomライセンス（仕様：時間無制限・参加人数300人まで）を、開催日と前後1週間の計2週間分を自由に使用できるよう、依頼者にライセンス付与します。

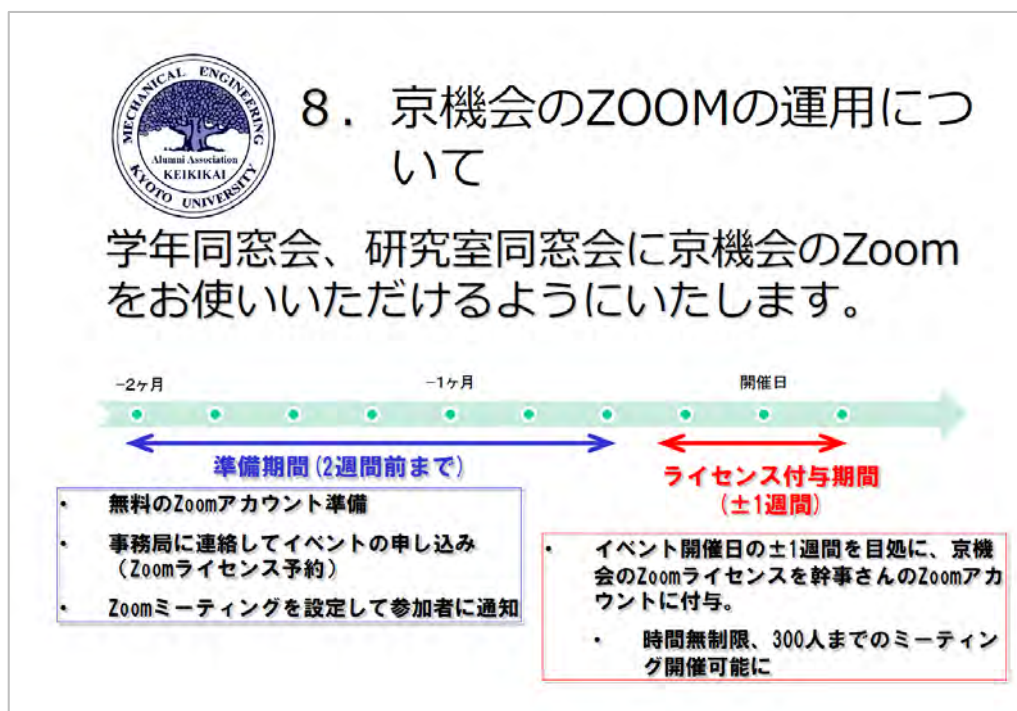
利用希望の場合は、Zoom対応アドレス（Zoomannounce@keikikai.jp）までご連絡ください。折り返し、事務局よりご連絡を差し上げます。

<学年同窓会>

学年幹事からのお申し込みを基本とします。学年幹事以外の方がZoom企画担当としてお申込みいただく場合は、学年幹事のアドレスをCCに入れたメールで京機会事務局（Zoomannounce@keikikai.jp）宛にご連絡ください。

<研究室同窓会>

教員（名誉教授・異動&退職された教員含む）からのお申し込みを基本とします。教員以外の方がZoom企画担当としてお申込みいただく場合は、関係教員のアドレスをCCに入れたメールで事務局宛（Zoomannounce@keikikai.jp）にご連絡ください。



(全体幹事会資料より)

第8回 京機カフェ テニスカフェ報告

成瀬忠史 (S47/1972卒)

日時：令和3年10月2日（土）13時～18時00分

場所：六甲アイランドテニススクエア オムニコート3面（3面 CGHコート）

〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目

TEL 078-857-3266 <http://rokko.tennis-school.co.jp/rokko.access.html>

次第：PART 1 紅白対抗ダブルス戦

PART 2 決勝トーナメント・親睦試合

参加者：19名

趣旨：テニス愛好の皆さんに、プレーを通じて交流の機会を増やす目的で、平成28年1月からテニスカフェを立ち上げ、神戸→京都→神戸→京都とこれまで7回開催し、兵庫・京都・大阪から80歳代から現役30歳代まで総勢54名（女性9名含む）の方々が参加いただいております。第8回は、ひさびさに神戸会場（六甲アイランド）で開催いたしました。今後も、年2回程度、関西一円（兵庫・京都・大阪他）でこれまでテニスを楽しんでこられた方々はもちろん、関西出張中の方、大学研究室の方や学生さんまで、テニスレベルにかかわらずに、参加していただきたく、京機会員であるかないかに拘わらず、その地域のテニス仲間にも声をかけながら、開催を企画していきたいと思っております。

実施結果：直前にやっと緊急事態宣言が解除され、天候も少し崩れるかもしれないとの心配もされましたが、当日になり良い天候に恵まれ、初参加2名、夫婦が2組を含む19人が、参加していただき、元気いっぱいプレーを楽しんでいただくことができました。

参加者（敬称略、五十音順）

紅組		白組	
お名前	個人番号	お名前	個人番号
本地美紀	1	成瀬千鶴子(瀬戸L)	①
柳谷節子(瀬戸L)	2	村上恭江(瀬戸L)	②
石鍋一文(JOY)	3	有本健夫	③
板垣正義(JOY)	4	池田博一(S47卒)	④
板垣勝則(JOY)	5	北野幸彦(S56卒)	⑤
岡本雅昭(S47卒/JOY)	6	高橋健司(S56卒)	⑥
亀岡 孝	7	徳井達児(S54卒)	⑦
佐野耕太郎	8	古庄 高	⑧
成瀬忠史(S47卒/JOY)	9	本地真一郎(S45卒)	⑨
吉谷幸二(JOY)	10	村田恵三	⑩

対抗戦成績

勝数

紅組	白組
7	11

個人戦上位者

1位：(佐野)・(古庄)
2位：(村上)・(板垣(勝))
3位：(柳谷)・(板垣(正))
3位：(吉谷)・(北野)

赤字は女性、丸囲み数字は白組



全スケジュールを終え、コート上で集合写真撮影



紅組



白組



優勝準優勝ペア



試合風景

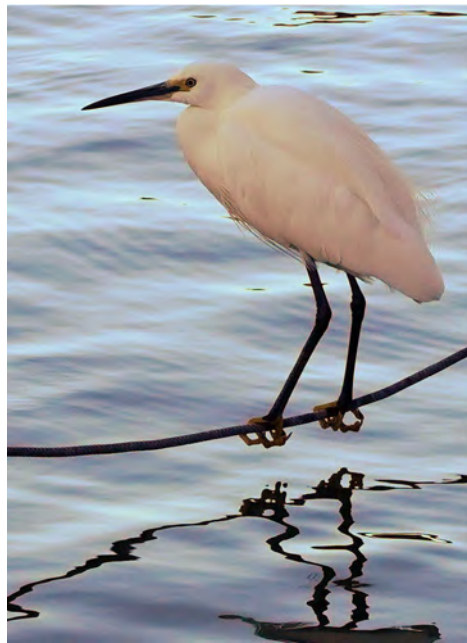
関東支部写真同好会 第20回撮影会（2021年11月11日）の報告

山下真司（S63/1988卒）

今回は11月11日（木）に東京都台東区の旧岩崎邸庭園にて約2年ぶりに撮影会を開催しました。平日にもかかわらず6名の方にご参加いただきました。

残念ながら改修中の部分もありましたが、平日は屋内も撮影可能ということで、それぞれ思い思いに伝統的な建物の撮影を楽しみました。その後上野公園を散策し、最後は老舗鰻屋さんにて懇親会で盛り上がりました。

作品の一部を紹介いたします。



「つかむ」浅野保夫さん（S44/1969卒）



「深秋の旧岩崎邸2階ベランダのイオニア式列柱と冷房室外機が蝟集する公団住宅」中村 定さん（S44/1969卒）



「シルクの天井」 山下真司さん (S63/1988卒)



増本雄治さん (S48/1973卒)

その他の作品や過去の作品も紹介しておりますので、写真同好会報告ページもご覧ください。

<https://keikikai.jp/category/a-report/a-kantou/a-kantou-photo/>

京都の散歩道 (11) 井上靖さんと朝比奈隆さん—文学と音楽の巨匠

新年の散歩道は、文学と音楽の巨匠から始めましょう。われらが京大の大先輩という親しみを込めたいので、敬語は用いないものの敬称略とはせず、井上靖(1907–1991.1.29)さんと朝比奈隆(1908–2001.12.29)さんと呼ばせていただきます。命日までわざわざ記したのは、井上さんは昨年1月末で没後30年、朝比奈さんは昨年末でちょうど没後20年というタイミングであったことをお知らせするためです。

井上さんは1932年(24歳)に九州帝大を中退して京都帝大文学部哲学科に入学、1936年(28歳)に卒業しました。一方の朝比奈さんは1928年(19歳)に京都帝大法学部に入学して1931年(22歳)に卒業。高等文官試験(高文)に落ちて阪神急行電鉄(現阪急電鉄)に就職するも、1933年(24歳)に文学部哲学科に学士入学して1937年(28歳)に卒業。二人とも回り道の多い学生時代で、同時期に京都帝大に在籍しました。その二人が、それぞれ文学と音楽の道を究めて1976年(69歳)と1994年(86歳)に文化勲章に輝くのですから、われわれ京大関係者にとっては嬉しく誇らしい限りです。

筆者は学生時代、まず『あすなる物語』で井上さんに接して感動し、続いて日本あるいは中国の歴史物に進みました。しかし読んだ本はそれほど多くはないので、井上さんについてここで詳述することもできず、先日近所の図書館で29巻からなる井上靖全集(新潮社、1995–2000、文末の総目次ご参照)¹を見て、ただただ圧倒されたことだけお伝えします。なお、井上さんが毎日新聞社、松本清張(1909–1992)さんが朝日新聞社、司馬遼太郎(1923–1996)さんが産経新聞社と、昭和を代表する文豪がいずれも新聞社勤務を経て大きな仕事をされたことを興味深く思います。

一方、朝比奈さんは大阪フィルハーモニー交響楽団などと『ベートーヴェン交響曲全集』を7回録音(世界記録)、その初回(1973)と最終回(2000)の全集を筆者は愛聴しています(正直なところ、ブルックナーは時間が長くてなかなかじっくり聴く余裕もないことも加わり、筆者には難しいです)。朝比奈さんと同年生まれのカラヤン(1908–1989)さんとは対極にあるような「愚直」(ご当人の好きな言葉)な演奏に感動します。なお、朝比奈さん自身による多数の本から一冊を選ぶと『楽は堂に満ちて』⁽¹⁾。一方、第三者による密度の高いものを厳選しますと、響敏也さん⁽²⁾、木之下晃⁽³⁾さん、岩野裕一⁽⁴⁾さん、中丸美繪⁽⁵⁾さんの本がお薦めです(大阪フィルについては渡辺佐⁽⁶⁾さんの本も)。朝比奈さんの場合、まず東京高等学校²第一期生としての人脈がその後の展開に大いにプラスしたことが印象的ですが、もちろん京都帝大や関西での新たな人脈も劣らず重要です。以下は井上さんとの接点が見える貴重な小文です。

¹ 井上靖記念文化財団理事長の井上修一氏から伺った話では、井上さんの全作品を収めるには、さらに16巻必要なので、多くの作品が井上靖小説全集(全32巻、新潮社、1972–75)の方にのみ収められているそうです。

² 1921年創立で1950年まで存続した官立の七年制高校。実質的に東京帝大にもつながっており、1950年代末における卒業生の活躍に対し大宅壮一さんが「ジュラルミン高校」と呼びました。文藝春秋1965年5月号の『同級生交歓』には、朝比奈さんの他、内田藤雄(ピアニスト内田光子さんの父)、篠島秀雄、清水幾多郎、出淵国保、日向芳齊、平井富三郎、宮城音弥の各氏が集合しています。

朝比奈隆氏と私 井上靖

私は昭和七年から十一年まで、京都大学文学部に籍を置いていた。専攻は美学であったが、学校には全然出なかったの、同じ専攻の学生の殆どを知らなかった。卒業前年の秋、何かの用事で主任教授の植田寿蔵（編集人注：1886-1973）博士にお目にかかりに研究室へ出向いて行ったら、あなたが井上君かと言われた。そしてあなたと同じようにいっこうに学校に顔を現わさないのがもう一人居ると、先生は付け加えられた。朝比奈隆氏であった。

しかし、朝比奈隆氏はその頃既に大学では有名であった。大学のオーケストラの指揮者として、氏の名前は、音楽とは無縁であった私もまた知っていた。

私は卒業を一年おくらせたので、京都大学には四年間籍を置いたことになるが、その四年間に、一度だけ朝比奈氏と言葉を交したことがある。卒業論文を文学部の事務室に提出しに赴いた時、やはり卒業論文を持って来た朝比奈氏と、事務室の窓口でお会いしたのである。昭和十一年の二月の初めだったと思う。

その日、二人は二十分ほど大学附近の道を歩いた。下宿でも同じ方面にあったのかも知れない。朝比奈氏は、あなたですか、井上さんという人はと、植田先生と同じようなことを言われた。そして、お互いに一回の講義も聴かないで卒業するということが虫がよすぎますよと、そんなことを言って、笑った。その時、大学附近の喫茶店へでもはいったのではなかったかと思うが、確かなことは憶えていない。ただ一つ、その日のことで憶えていることは、一体音楽とは何か、指揮するとは何かと、甚だ第一義的なことを質問したかったのであるが、結局はそれを口に出さなかったことである。

その春、私はどうにか大学を卒業させて貰ったが、朝比奈氏が卒業したかどうかは知らない。氏は論文をひっこめるか何かして、もう一年おくれられたのではなかったかと思う。

数年前、「文藝春秋」誌上に「同級生交歓」という写真を載せるために、東京のどこかで氏とお会いしたことがある。大学卒業以来初めてであり、まさに同級生交歓であった（編集人注：後で転載する文藝春秋の記事から、正しくは「数年前」ではなく「十一年前」で、場所は「日比谷公会堂」です）。

その折、私は話題を音楽の方に持って行きかけて、途中で思い返して、話を他に移してしまった。若い時でさえ保留した質問を、今更どうして再びとり上げる必要があるか、そんな気持がどこかにあった。

それ以来、今日まで、氏とはお会いしていない。私は氏の仕事がいかなるものか、新聞や雑誌で承知しているし、氏の指揮する交響楽団の演奏を、聴衆の一人として聴いてもいる。派手な舞台上の氏を遠くから見ていて、あそこに朝比奈隆が居ると思う。同じように氏もまた、小説家としての私の文章を眼にする機会を一回や二回は持っているのではないかと思う。大学の同級生ではあるが、そしてお互いに芸術、文学の仕事に携っているのであるが、二人の関係は甚だ疎遠と言う他はない。

疎遠という言葉は使ったが、他に適当な言葉がないから、この言葉に代行して貰ったわけであるが、実は、私の氏に対するものは、決して表面的意味での疎遠と言えるようなものではないのである。と同様に、おそらく氏の私に対するものも同じことではないかと思うのである。若い日、あの自己表現を摸索している、明るくも暗くもある特殊な時期に、そして朝比奈氏にとっても、私にとっても、おそらく生涯で最も大切であったに違いない時期に、たとい短い時間でも、京都の町を肩を並べて歩いた者同士が、どうして相手に疎遠であることができるであろうか。

疎遠でなかったからこそ、私は数（編集人注：十一）年前にお会いした時にも、音楽について何も質問しなかったのである。この次お目にかかっても、やはり音楽についての質問は保留することになるのではないかと思う。

音楽というものは、指揮するということは、一体何ですか。もし私が質問したら、氏もまた私に質問するかも知れない。文学とは、小説とは、詩とは、そしてそうしたものを書くということは、一体何ですか、と。

考えてみると、若い日に交すべきであった言葉を、そして若い日であったら交してもおかしくなかった言葉を、そして交さないより交しておいた方がよかったに違いない言葉を、私たちは交していないのである。私たちは、音楽家としても、文学者としても、まだお互いに名乗りをあげていないのである。

この小文を綴りながら、一度ゆっくりと氏にお目にかかりたい気持がしきりである。いつか京都大学の事務室の前でお目にかかってから三十数年経っている。当時大学の主任教授であった植田寿蔵博士は現在九十歳近い高齢であるが、今なおご健在である。博士は私のこの文章を読まれたら、音楽とか、文学とか、そんなものは判りはしませんよ。判ったら芸術家でも、文学者でもないでしょう。昔、一度も教室に顔を見せなかった二人の弟子に対する労わりの気持をこめて、博士は優しくこうおっしゃりそうな気がする。

朝比奈隆、『ベートーヴェン交響曲全集』学研(1973)や再版版ナクソス(2013)のライナーノート、あるいは『井上靖全集別巻』、pp.369-371、新潮社(2000)より。井上修一氏のご許可を得て全文を転載。なお、朝比奈隆、『この響きの中に 私 の音楽・酒・人生』、実業之日本社(2000)の序文としても再掲されており巻末の初出一覧では(1978)となっていますが、正しくは学研から最初にレコードが販売された(1973)です。

話が前後しますが、朝比奈さんが大阪フィルハーモニー交響楽団を日本屈指の楽団に育て上げた背景には、幾多の偶然も重なっています。そもそも東京育ちの朝比奈さんが東京高校から京都帝大に進学したのは、東京帝大入試に失敗したのが発端ですが、加えて当時東京高校に送られてきた京大新聞の記事が決定打となりました。京大音楽部(1916年誕生)が新交響楽団(のちのNHK交響楽団)にも登場したロシアのエマヌエル・メッテル(1878-1941)氏を、大村恕三郎、深瀬周一、瀬戸口藤吉の各氏に続く第4代の常任指揮者としているとの記事を見て、かつ黄金時代の法学部——憲法は佐々木惣一(1878-1965)教授、民法は末川博(1892-1977)教授、刑法は滝川幸辰(1891-1962)教授に学べるということで、迷うことなく京都帝大をめざしたそうです。

朝比奈さんが阪神急行電鉄に就職したのは、朝比奈さんの複雑な出自と関係しています⁽⁵⁾。朝比奈さんの実父 渡邊嘉一(1858-1932)氏は「日本土木史の父」と呼ばれ、全国の電気鉄道会社などの経営に参画したほか、関西瓦斯社長、東京月島鉄工所社長、東洋電機製造社長、東京石川島造船所(現IHI)社長、第7代帝国鉄道協会会長などを歴任した大人物、さらに、生後まもなく養子としてもらった先の養父 朝比奈林之助(1869-1923)氏は鉄道院理事であったため、高文に落ちて鉄道省への入省が叶わなかった朝比奈さんは関係深い鉄道会社に勤めることになりました。そこで、電車の運転手、踏み切り番、盗電の査察、さらに阪急デパートでの販売員などを経験しましたが、2年後京大に学士入学したのち退社します。朝比奈さんは以下のように語っています。

よく皆さんが音楽に対する情熱とか、どうしてもやりたくてたまらないからと。そんなんじゃないけど、まあ好きは好きだったんでしょうね。大学を卒業して就職して、阪急をやめた時点ですることがなくなったんですよ。やめ方が非常に抽象的で、けんかしたわけでもクビになったわけでもない。いまだに会社に入ったりして遊んでますからね。大学にでも籍をおかないと会社をやめさせてくれそうもない。

文学部へ戻って、ほかに空きがなかったので哲学科へ入っちゃった。大学へ行ってみたら井上君がいる。お前もか、ってわけですよ。彼は放浪の青年、哲学なんか毛頭やる気がなくて。ぼくはOBで京大オーケストラのヴァイオリンを弾いてた。指揮者がメッテル先生。その影響が大きいですな。

『朝比奈隆のすべて 指揮生活60年の軌跡』、芸術現代社(1997) p.123より

朝比奈さんのその後も波瀾万丈で興味深いですが、「京機短信」中の記事ということで、京大関係の話題に焦点を当てて締めくくらせていただきます。前述の井上さんの文章から、[文藝春秋1962年12月号の『同級生交歓』](#)が見つかりましたので、文藝春秋社のご許可をいただいて、貴重な写真と文章を転載します。(なお、文藝春秋の「日本の顔」の欄には、井上さんと朝比奈さんが、それぞれ1970年8月と1979年6月に取り上げられてもいます。)



左から朝比奈さん、井上さん、古谷さん

毎日新聞論説委員 古谷 綱正
 作家 井上 靖
 指揮者 朝比奈 隆

私たちは同級生らしい 無責任ないい方だが 学生時代は三人ともおたがいに顔を知らなかった そのころ（昭和八年）の京大文学部美学専攻は 一学級六 七人のはずだから われながらあきれた話である 朝比奈君は当時すでに音楽学校の教師もしていたためだし 私は芝居のまねごとにつつつを抜かしていた 井上君はただ怠けたのだというが サンデー毎日の懸賞小説で千円せしめたりしているから そっちの方が忙しかったのかもしれない 朝比奈君が 知らない人に話しかけられ それが試験を受かったばかりの講師だったり 井上君が 三年のとき主任教授の植田寿蔵先生に初対面のあいさつをしたとか 珍談はいくらでもある それでもちゃんと卒業したのだから “良き時代” だったのだろう もっとも私たち三人とも 植田先生とは深い人間的つながりを持ったと信じている 単位を集めただけの卒業とは 違うという自負はある（古谷綱正）

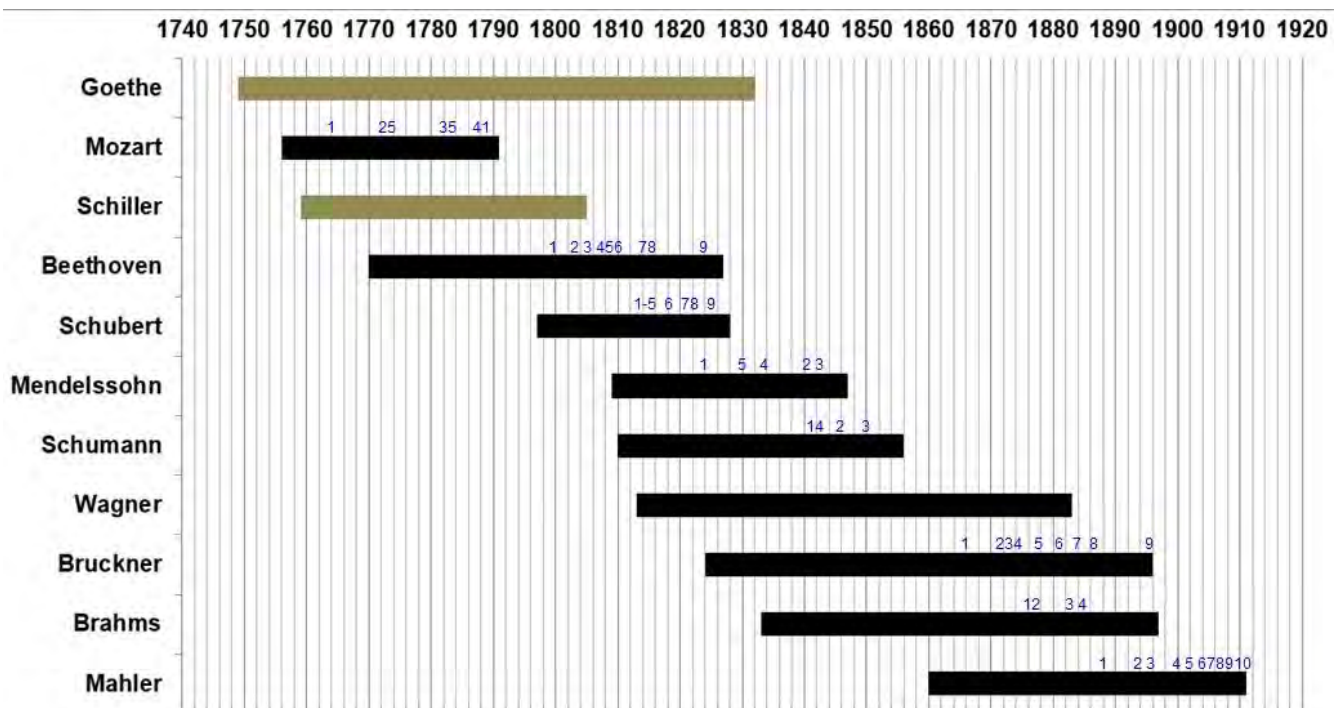
確かに “良き時代” だったんだと羨ましくもなりますね。

参考文献

- (1) 朝比奈隆、『楽は堂に満ちて』、日本経済新聞社（1978）、中央公論社（1995）、音楽之友社（2001）
- (2) 響敏也、『親父の背中にアンコールを 朝比奈隆の素顔の風景』、大阪書籍（1985）
- (3) 木之下晃、『朝比奈隆 長生きこそ、最高の芸術』、新潮社（2002）
- (4) 岩野裕一、『朝比奈隆 すべては「交響楽」のために』、文藝春秋（2008）
- (5) 中丸美繪、『オーケストラ、それは我なり 朝比奈隆 四つの試練』、文藝春秋（2008）、中公文庫（2012）、現在はKindle版あり
- (6) 渡辺佐（たすく）、『オーストリア辺境の旅』、サンライズ出版（2010）、現在はKindle版あり〔本書のオリジナルは、『聖フロリアンの鐘—大阪フィル欧州公演の記録』、第一法規版（1977）で、その新訂・一部削除・増補版となっています。〕

追記

朝比奈さんはドイツ系、とりわけベートーヴェン・ブルックナー・ブラームスをよく演奏しました。そこで、古典派からロマン派にかけての主な作曲家とその交響曲の作曲時期をおおよその位置に示します。



朝比奈さんのブルックナーは最高とも言われます。なかでも1975年10月12日、大阪フィルハーモニー交響楽団が、オーストリアのリンツ郊外にある聖フロリアン修道院(大オルガンの下の地下聖堂にブルックナーが眠っています https://en.wikipedia.org/wiki/St._Florian_Monastery)で交響曲第7番(上図からも分かるようにブルックナーが敬愛するワーグナーが亡くなったところに作曲され、第2楽章はワーグナーへの「葬送音楽」とされています)を演奏したときのことで、渡辺佐さんの著書(6)から抜粋しましょう。

定刻より約一五分遅れて、朝比奈のタクトが動いた。(中略)第一楽章の終わったところで、数人、あるいは十数人が拍手をした。長大なこの楽章を一曲の終りと勘ちがしいとは思えない。感に堪えかねての拍手であつたらうか――。

第二楽章。(中略)悲哀に沈む旋律が宗教的な慰めを得て、消え入るような二つのピッチカートで息を止めた。朝比奈は次の楽章へ移ろうとして、タクトを上げかけた。その瞬間である。

鐘楼の鐘が低く重く鳴った。長い余韻を残して、あたかも前の楽章の音楽の続きであるかのように響いた。一つの鐘が消えて、朝比奈の体がかすかに動こうとした時、また一つの鐘が鳴った。そこで朝比奈は、それが五時の時鐘であることに気付き、手を下ろした。

まさに、天恵とでもいうべき奇蹟であった。偶然はいくつか重なっていた。開演の遅れ、第一楽章のあとの戸惑いがちな拍手、それらがなければ、演奏中に鐘は鳴ったはずであった。(中略)

その時、聖フロリアン修道院の大理石の広間に居合わせた大阪フィルの一〇〇人と、オーストリアの聴衆の約六〇〇人は、夕闇の迫る中で、ひとときの静寂に息のみ、ひとしく鐘の響きに聞き入ったのであった。

中丸さんの著書(5)でも、「朝比奈がタクトを上げかけた瞬間である。鐘楼から五時をつげる鐘の音が響いてきた。それは、地下から沸き上がってきたブルックナーの意志をしめす奇跡のように感じられた」と感銘深く表現されています。なお幸いにも、このときの演奏は昨秋に最新マスタリングされたCDでも聴くことができます。鐘の音は耳を澄ませば“かすかに”聞こえる程度ですが、確かに深い感動を覚えます。



(ミュンヘンとウィーンの直線距離は350 km。ミュンヘン・ザルツブルク・リンツ・ウィーンが、東西方向に100 km程度の間隔で並んでいることが分かります。)

朝比奈さんには、さらにベートーヴェンの音楽でも感銘深いことがおこります。朝日新聞の天声人語は2000年12月31日、朝比奈さんを話題としています。「おととい、朝比奈さんは大阪のフェスティバルホールで、ベートーヴェンの第九交響曲を指揮した。演奏は大阪フィルハーモニー交響楽団。素晴らしい出来で、客席を埋めた二千七百人が湧いたようだ。第九を振ったのはこれで二百五十回目、現在九十二歳である。」続く12月30日も第九で二百五十一回目でした。しかし、2001年が明けて21世紀を迎え、朝比奈さんも九十三歳になった10月24日に名古屋で行った演奏会の翌日に入院、このため12月29日の朝比奈さんにとって二百五十二回目となるはずだった第九の演奏会は、若杉弘さんによる代理指揮で行われました。木之下さんの著書(3)によると、「朝比奈さんは、演奏が第三楽章からフィナーレに入る夜八時頃に危篤となり、演奏会が終わって間もない午後十時三十六分、ついに旅立たれた」とのことです。木之下さんは次のように結んでいます。「朝比奈さんは、世を去るその最期の日まで、指揮者として現役を貫いたのであった。」

付録

井上靖全集（新潮社、1995-2000）総目次

(編集人新規作成:ルビや補足箇所などは藍色字に、三高・京大・京都関係で気付いた箇所は赤字にしました。抜けや間違いがあると思いますので、お気付きの場合は sakura@hideoyoshida.com までご一報いただければ幸いです。)

第1巻	第2巻	かしわんば	第3巻	滝へ降りる道
北国.....21	比良のシャクナゲ.....7	表彰.....356	ある愛情.....9	夏花.....374
地中海.....45	漆胡樽.....33	勝負.....366	ある自殺未遂.....19	晩夏.....392
運河.....63	人妻.....50	山の湖.....374	七夕の町.....34	海浜の女王.....402
季節.....79	踊る葬列.....51	利休の死.....397	ある偽作家の生涯.....45	頭蓋のある部屋.....403
遠征路.....99	岬の絵.....70	潮の光.....407	二枚の招待状.....76	美也と六人の恋人.....417
乾河道.....125	あすなろう.....77	傍観者.....429	昔の愛人.....101	断崖.....437
傍観者.....169	断雲.....93	百日紅.....453	梧桐の窓.....112	山の少女.....459
星闌干.....207	七人の紳士.....105	澄賢房覚書.....463	鶉.....125	爆竹.....472
拾遺詩篇.....251	流星.....123	大いなる墓.....493	薄氷.....134	再会.....479
謎の女(続篇).....349	早春の墓参.....134	夜明けの海.....506	楼門.....144	ある日曜日.....481
夜霧.....358	星の屑たち.....152	斜面.....526	北の駅路.....156	石の面.....498
三原山晴天.....362	死と恋と波と.....173	小鳥寺.....537	貧血と花と爆弾.....168	燃ゆる緋色.....507
初恋物語.....383	二分間の郷愁.....195	玉碗記.....548	桶狭間.....205	青い照明.....520
紅荘の悪魔たち.....403	石庭.....198	三ノ宮炎上.....565	氷の下.....219	黄いろい帽子.....529
霰の街.....423	波紋.....209	秘密.....590	楕円形の月.....234	風わたる.....532
あすなろう.....431	雷雨.....228	古九谷.....595	小さい旋風.....246	騎手.....544
戦友の表情.....434	碧落.....246		千代の帰郷.....261	春寒.....556
母の手.....437	黄色い鞆.....257		白い手.....272	天目山の雲.....570
旧友.....439	舞台.....275		仔犬と香水瓶.....288	春のうねり.....586
めじろ.....442	銃声.....294		贈りもの.....307	伊那の白梅.....602
無声堂.....445	無蓋貨車.....311		海水着.....309	
ある兵隊の死.....448	年賀状.....313		青いボート.....311	
猟銃.....457	悪魔.....315		落葉松.....315	
闘牛.....495	結婚記念日.....329		水溜りの中の瞳.....327	
通夜の客.....541	蜜柑畑.....340		あげは蝶.....348	

第4巻	湖の中の川..... 576	第5巻	幽鬼..... 508	第6巻	
異域の人..... 7	白い街道..... 584	俘囚..... 9	青葉の旅..... 517	神かくし..... 9	
信康自刃..... 20	湖岸..... 598	ダム of 春..... 20	楼蘭..... 536	ある交友..... 20	
稻妻..... 36	篝火..... 606	川の話..... 33	川村権七逐電..... 566	故里の海..... 34	
末裔..... 45		真田軍記..... 50	平蜘蛛の釜..... 579	梅林..... 41	
みどりと恵子..... 72		颱風見舞..... 93	一年契約..... 595	ハムちゃんの正月.. 49	
野を分ける風..... 90		夏の雲..... 103		とんぼ..... 57	
大洗の月..... 111		ざくろの花..... 122		凍れる樹..... 66	
漂流..... 122		初代権兵衛..... 133		洪水..... 91	
湖上の兎..... 141		紅白の餅..... 153		面..... 105	
グウドル氏の手套 152		梅..... 165		冬の来る日..... 117	
少年..... 163		あした来る人..... 168		街角..... 132	
信松尼記..... 167		その人の名は言えな い..... 171		馬とばし..... 140	
僧行賀の涙..... 184		どうぞお先に..... 174		春の入江..... 149	
森蘭丸..... 198		火の燃える海..... 189		北国の春..... 167	
驟雨..... 219		蘆..... 206		狼災記..... 180	
ひとり旅..... 228		暗い舞踏会..... 219		考える人..... 196	
その日そんな時刻 241		レモンと蜂蜜..... 235		補陀落渡海記..... 214	
昔の恩人..... 286		夏草..... 247		海の欠片..... 232	
胡桃林..... 295		高嶺の花..... 259		ローマの宿..... 244	
春の雑木林..... 321		孤猿..... 270		小髻梯..... 260	
赤い爪..... 334		波の音..... 277		訪問者..... 277	
柰さん..... 352		司戸若雄年譜..... 288		晴着..... 285	
青いカフスポタン... 355		ある関係..... 296		岩の上..... 295	
花粉..... 358		ある旅行..... 306		菊..... 304	
鮎と競馬..... 371		良夜..... 320		故里美し..... 315	
殺意..... 386		犬坊狂乱..... 332		色のある間..... 325	
父の愛人..... 397		トランプ占い..... 346		フライイング..... 339	
風..... 407		佐治与九郎覚書... 361		加芽子の結婚..... 356	
夜の金魚..... 413		屋上..... 370		古い文字..... 365	
錆びた海..... 423		高天神城..... 380		裸の梢..... 390	
チャンピオン..... 439		四つの面..... 390		夏の焰..... 400	
投網..... 472		夏の終り..... 401		明るい海..... 407	
合流点..... 480		ある女の死..... 410		見合の日..... 420	
姨捨..... 497		別れの旅..... 423		別れ..... 434	
二つの秘密..... 511		冬の外套..... 446		明妃曲..... 445	
天正十年元旦..... 530		ボタン..... 454		あかね雲..... 465	
帰郷..... 536		奇妙な夜..... 463		僧伽羅国縁起..... 472	
風のある午後..... 543		満月..... 473		城あと..... 479	
黙契..... 555		花のある岩場..... 488		宦者中行説..... 497	
失われた時間..... 564				羅刹女国..... 508	

土の絵.....517	第7巻	ほくろのある金魚..603	第8巻	楊貴妃伝.....411
監視者.....525	短篇	ひと朝だけの朝顔 605	流転.....7	風濤.....573
塔二と弥三.....531	わが母の記.....9	三ちゃんと鳩.....607	その人の名は言えな	
ローヌ川.....540	永泰公主の頸飾り..97	猫がはこんできた手	い.....69	第16巻
富士の見える日...550	褒姒(ほうじ)の笑い112	紙.....610	黯い潮.....231	夏草冬濤.....7
冬の月.....561	墓地とえび芋.....119		白い牙.....325	後白河院.....407
眼.....572	魔法の椅子.....129		戦国無頼.....431	おろしや国酔夢譚 509
	テペのある街にて 136			
	帽子.....153		第9巻	第17巻
	古代ペンジケント..161		青衣の人.....7	化石.....7
	胡姫.....179		暗い平原.....139	夜の声.....455
	魔法壘.....187		あすなろ物語.....197	西域物語.....611
	崑崙の玉.....194		昨日と明日の間...301	
	海.....215		風林火山.....525	第18巻
	四角な石.....222			わだつみ.....7
	アム・ダリヤの水溜り		第10巻	
234		あした来る人.....7	第19巻
	聖者.....245		淀どの日記.....277	額田女王.....7
	風.....261		満ちて来る潮.....521	北の海.....297
	鬼の話.....270			
	桃李記.....290		第11巻	第20巻
	壺.....307		黒い蝶.....7	櫛の木.....7
	道.....316		射程.....173	四角な船.....235
	二つの挿話.....328		氷壁.....399	星と祭.....499
	ダージリン.....335			
	セキセイインコ.....359		第12巻	第21巻
	川の畔り.....366		天平の薨.....7	流沙.....7
	炎.....388		海峡.....105	
	ゴー・オン・ボーイ.400		敦煌.....285	第22巻
	石濤.....412		蒼き狼.....421	幼き日のこと.....7
	生きる.....425			本覚坊遺文.....119
			第13巻	孔子.....223
	戯曲		渦.....7	
	明治の月.....443		しろばんば.....365	
	就職圏外.....457			
			第14巻	
	童話		崖.....7	
	星よまたたけ.....477		憂愁平野.....543	
	銀のはしご.....563			
	どうぞお先きに！.599		第15巻	
	くもの巣.....601		城砦.....7	

第23巻	父のこと..... 176	青春の粒子..... 245	私と毎日会館..... 300	私の洋画経歴..... 529
私の自己形成史..... 17	あすなろのこと..... 177	千本浜に夢見た少年	ハトとAさん..... 300	今年のプラン..... 531
忘れ得ぬ人々..... 45	三つの海..... 179	の日々..... 246	杉さんのこと..... 302	勝手な夢を二つ..... 531
過ぎ去りし日日..... 71	風の話..... 180	金井君の詩を読んで	竹本辰夫君のこと 303	作家の日記..... 532
＊	ほんとうのライスカレ 247	勇気あることば..... 304	白い手の少女..... 534
[旭川]	一..... 182	沼津とわたし..... 248	法隆寺のこと..... 305	趣味ということ..... 535
旭川・伊豆・金沢... 123	新緑と梅雨..... 184	記念誌刊行にあたつ	中国山脈の尾根の村	正月の旅..... 541
出生地の話..... 125	天城の粘土..... 185	て..... 252 306	私の一日..... 542
北海道の春..... 126	「しろばんば」..... 187	ああ沼津中学！... 253	「サンデー毎日」と私	「ピクニック」を観る
すずらん..... 127	土蔵の窓..... 187	[大正十五年書簡] 254 309 544
[湯ヶ島]	わさびの故里..... 188	[金沢]	夕暮の富士..... 310	某月某日..... 546
雑木林の四季..... 128	故里美し..... 190	金沢の正月..... 258	酒との出逢い..... 314	講道館..... 546
都会と田舎..... 129	容さざる心..... 191	あんころ..... 259	辻さんと私..... 316	季節の言葉..... 550
龍若の死..... 130	思い出すままに... 194	私の石川県時代... 260	毎日新聞と私..... 317	夏の終り..... 551
伊豆の食べもの... 132	天城湯ヶ島..... 205	井戸と山..... 263	終戦の放送 陛下を	東京という都会..... 552
子供の正月..... 133	七歳の時の旅..... 206	弔辞..... 265	身近に..... 318	樹木の美しさ..... 554
湯ヶ島..... 134	故里の富士..... 208	五陵の年少..... 266		団体旅行者..... 555
郷里のこと..... 137	幼い日々影絵... 209	五陵の年少..... 267	随想	山登りの愉しみ..... 556
らくがん..... 139	故里の家..... 210	四十年目の柔道着	わが一期一会..... 323	私の登山報告..... 558
故里の鏡..... 141	わさび美し..... 211 268	四季の雁書..... 453	映画「遭難」を見る 560
母を語る..... 143	[沼津]	「オロチヨンの挽歌」讃	＊	大阪駅付近..... 561
幼時の正月..... 146	わが青春放浪..... 212 271	秋の夜..... 503	ひばの木..... 562
故郷への年賀状... 148	人と風土..... 220	私の四高時代..... 272	近くに海のある風景	季節の言葉 五月 564
子供と風と雲..... 148	試験について..... 226	思い出多き四高... 273 503	夏の初め..... 565
ふるさと一伊豆一 149	わが青春記..... 228	[京大]	水仙のはなし..... 505	旅のこと..... 565
私の味覚..... 151	赤い林檎..... 230	弘前の思出..... 275	あすなろう..... 507	遠雷..... 566
貫く実行の精神... 153	前田先生のこと... 231	十二段家..... 276	日記..... 508	皇太子よ、おめでとう
子供の頃..... 154	「むらさき草」の著者	龍安寺石庭..... 277	永平寺の米湯..... 509 574
故里の山河..... 156 232	仁和寺の楼門..... 279	アメリカ文化..... 510	養之如春..... 575
郷里伊豆..... 157	我が十代の思い出	四季の石庭通い... 280	学校給食のこと... 512	海の元旦..... 576
故里の子供たち... 161 234	九鬼教授のこと... 282	某月某日..... 513	石と木と..... 576
ふるさとの正月..... 161	静岡の思い出..... 235	[毎日新聞社]	僕にかわって..... 514	才能 あなたの新しい
天城の雲..... 162	千本浜のこと..... 237	「サンデー毎日」記者	登山愛好..... 515	首途に... .. 578
湯ヶ島小学校..... 164	私の愛することば 238	時代..... 285	講演旅行スナップ 517	穂高の犬..... 579
故里の家..... 165	青春のかけら..... 238	学芸部..... 290	講道館の寒稽古... 518	感じたこと二つ..... 581
匂い..... 167	中学時代の友..... 239	老兵..... 292	父の願い..... 520	山なみ美し..... 582
天城に語ることなし	たのしかった国語の	「創造美術」の誕生	新聞記者というもの	秋索々..... 583
..... 169	時間..... 241 293 521	新聞記..... 584
幼いころの伊豆... 170	針金の欠片と夕暮の	日記から..... 294	京に想う..... 525	養之如春 I..... 586
私のふるさと..... 171	富士..... 242	二十年..... 298	某月某日..... 526	山へ行く若者たちに
台風..... 174	わが青春の日々... 244	鳩..... 299	クリスマス・イブ東京... 527 587

冬を讃う..... 589	神かくし..... 648	点は墜石の如く..... 703	月光しるき夜..... 769	第24巻
某月某日..... 590	還暦有感..... 650	贅沢な時間..... 704	手術で得た天命への	作家・作品論
山の美しさ..... 591	切り棄てよ..... 651	天然の林美し..... 705	理解..... 771	[萩原朔太郎]
高い星の輝き..... 593	正月三ケ日..... 652	落葉しきり..... 706	天命について..... 772	詩人との出会い..... 19
私の辞書..... 595	年の初めに..... 653	冬の朝..... 708		[萩原朔太郎初版本
新しい政治への期待	異国で考える日本..... 655	去年・今年..... 710		翻刻版]推薦文]..... 21
..... 596	駒場の春..... 657	一本の長い道..... 713		「郷土望景詩」讃..... 21
今日このごろ..... 598	切りすてよ..... 658	雪の宿..... 714		[北原白秋]
人生の智慧..... 601	私のゴルフ..... 659	だんらん団梨..... 715		名作かんしょう..... 23
二つのブービー賞..... 601	生命の問題..... 660	雪月花..... 717		[堀口大學]
料理随筆..... 604	ゴルフ..... 662	きれい寂び..... 719		堀口先生のこと..... 25
人間を信ずるとい	一年蒼煌..... 663	永遠の信頼樹立を		[三好達治]
と..... 605	陽光輝く辿跡を訪ね 726		「測量船」と私..... 28
道 道 道..... 607	る..... 665	柔道の魅力..... 728		三好達治の「冬の日」
父として想う..... 609	少年老いやすし..... 666	年の初めに..... 729	 29
けやきの木..... 614	文化の氾濫..... 667	カラヤン讃..... 730		[丸山薫]
若木とびょうぶ..... 615	これを養う春の如し	日本独自の美しさ..... 732		二つの詩集..... 31
北海のフグ..... 616 668	年の初めに..... 733		丸山薫の詩..... 32
富士の話..... 619	職人かたぎ その他	自分の見方で物を見		[草野心平]
私の文学碑..... 620 669	る..... 736		草野心平・讃..... 35
猫の話..... 622	旅で会った若者..... 670	人生の滑り台..... 737		草野さんのこと..... 36
断絶..... 624	万国博開会式を見て	旅行..... 739		[金子光晴]
少年に与える言葉..... 625 673	年頭に思う..... 740		金子光晴氏の詩業..... 37
四角な箱の中で..... 626	樹木美し..... 676	人生の階段..... 742		[安西冬衛]
私のビジョン..... 628	明窓浄机..... 677	養之如春Ⅱ..... 744		安西冬衛氏の横顔..... 38
三つの書齋..... 629	文化財の保護につい	集会へ寄せる..... 744		[北川冬彦]
ローマから東京へ..... 630	て..... 679	四十五歳という年齢		詩集・北京郊外にて
オリンピック開会式を	孔子の言葉..... 681 745		他..... 39
見る..... 632	幸福について..... 682	木枯..... 747		[竹中郁]
五輪観戦記..... 635	桃李の季節..... 685	小寒、大寒..... 748		詩人 竹中郁氏..... 40
たくまざる名演出..... 636	言葉の生命..... 687	春寒..... 748		詩集 ポルカ マズル
私のさかな..... 638	日本のことば・日本の	ひまわり..... 749		カ..... 42
人生の階段..... 638	こころ..... 689	七十五歳の春..... 749		[小野十三郎]
初孫讃..... 640	六十六段目の展望	好きな言葉..... 751		拒絶の木..... 42
ゴルフ..... 641 690	四季それぞれ..... 759		生粋の詩、生粋の詩
旅の効用..... 642	けやき美し..... 691	古稀の旅..... 762		人の魅力..... 43
旅先からの便り拝見	無形遺産三つ..... 693	己れを尽くす..... 763		[伊東静雄]
..... 643	時計とカメラ..... 695	喜寿の年..... 764		伊東静雄の詩..... 44
お話を集めて歩く..... 644	ものを考える時間..... 698	現代史の記述者..... 766		「夏の終」解説..... 45
還暦有感..... 645	中国の文化財保護	年の初めに..... 767		蟬のこえ..... 46
山美し 山恐ろし..... 647 700	尽己..... 768		伊東静雄について..... 47

「伊東静雄全集」に寄 せて..... 48	解説..... 106	解説..... 192	[伊藤整]	「夜のリボン」推薦 文]..... 277
[真田喜七] 109	芥川龍之介の「トロツ コ」..... 201	[高見順]	解説..... 277
真田氏のこと..... 49	豪華で精巧な作品	好きな短篇..... 202	「死の淵より」につい て..... 239	舟橋氏の姿勢..... 280
真田喜七氏の作品 50 110	芥川の短篇十篇... 203	二冊の本..... 242	新・忠臣蔵に期待する 281
真田さんのこと..... 51	谷崎先生のこと... 110	[菊池寛]	[岡本かの子]	日本文の正統派... 282
[富士正晴]	解説..... 112	「[菊池寛文学全集] 推薦文]..... 205	丸子のとろろ汁..... 244	弔辞..... 282
富士正晴版画展..... 53	遺作として新たに読 み返したい..... 132	菊池さんのこと..... 205	[中島敦]	舟橋さんの人と作品 284
[「賈・久坂葉子伝」推 薦文]..... 53	「細雪」讚..... 133	[野上弥生子]	孤独な咆吼(ほうこう) 248	[檀一雄]
[清岡卓行]	「吉野葛」を読んで135	野上先生のこと..... 207	中島敦全集全四巻に 寄せて..... 249	石川五右衛門..... 286
芸術的な握手..... 54	[佐藤春夫]	野上さんのこと..... 208	山月記..... 250	足跡に汚れない287
[森鷗外]	佐藤春夫..... 137	[川端康成]	ふしぎな光芒..... 251	[川口松太郎]
雁..... 55	晶子曼陀羅..... 138	川端康成の受賞... 210	ふしぎな光芒..... 253	川口さんと私..... 288
「追儺」その他..... 56	「悲壮美の世界」推 薦文]..... 139	川端さんのこと..... 212	「木乃伊」讚..... 253	[永井龍男]
解説..... 59	悲壮美の世界..... 140	晩年の川端さん... 213	[大佛次郎]	永井さんのこと..... 290
[夏目漱石]	佐藤春夫全集につい て..... 141	川端さんの眼Ⅰ... 215	大佛さんの作品... 255	「青梅雨」その他... 292
漱石の大きさ..... 65	「自選佐藤春夫全集」 第六巻解説..... 142	川端さんの眼Ⅱ... 216	大佛さんの椅子... 256	[坂口安吾]
“猫”と私..... 66	佐藤春夫氏の「戦国 佐久」..... 145	「定本図録川端康成」 刊行のことば..... 217	若き日の信長..... 258	信長..... 294
[徳田秋声ほか]	わが北海道..... 147	鬱然たる大樹を仰ぐ 218	大佛さんと私..... 259	坂口さんのこと..... 295
解説..... 69	北海道の先生 二つ の句..... 148	「伊豆の踊子」につい て..... 218	「つきじの記」を読んで 261	[和田芳恵]
[島崎藤村]	[「定本佐藤春夫全 集」推薦文]..... 149	「眠れる美女」を読む 221	[吉川英治]	弔辞..... 297
解説..... 74	解説..... 149	短篇四つ..... 224	[「私本太平記」推薦 文]..... 262	[「和田芳恵全集」推 薦文]..... 298
藤村全集の意義..... 89	殉情詩集..... 169	掌の小説と装画集「四 季」より..... 228	稀有な作品..... 263	[今官一]
[永井荷風]	「鷺江の月明」讚... 172	[横光利一]	吉川さんのこと..... 263	今さんと私..... 299
荷風の日記..... 90	「田園の憂鬱」を読む 174	「眠れる美女」を読む 221	[「吉川英治全集」推 薦文]..... 265	[野間宏]
[志賀直哉]	[室生犀星]	中野全集について229	秋索索..... 265	野間宏..... 300
志賀さんをいたむ... 94	休息を知らなかった作 家..... 177	北京の中野さん... 230	吉川英治の仕事... 267	小説への誘惑者... 302
一人でも多くの人に95	解説..... 177	中野さんの詩..... 232	[丹羽文雄]	野間宏氏のこと..... 304
「スズメの誤解」..... 95	金沢の室生犀星... 189	[梶井基次郎]	永遠の未完成..... 268	一生消えぬ衝撃... 306
晩年の志賀先生..... 98	[芥川龍之介]	小説の文章というもの —梶井基次郎と徳田秋声 —..... 234	丹羽さんの顔..... 271	栄光と孤高の記録307
[谷崎潤一郎]	宇治拾遺物語と芥川 の作品..... 190	[深田久弥]	旅の丹羽文雄..... 272	[武田泰淳]
連載されるまで —「少 将滋幹の母」のエピソード —..... 100	解説..... 177	深田久弥氏と私... 235	[「親鸞」推薦文]... 273	愛と誓い..... 307
「谷崎潤一郎随筆選 集1」解説..... 101	解説..... 177	[舟橋聖一]	文学の大河..... 274	[福永武彦]
「吉野葛・盲目物語」 解説..... 103	宇治拾遺物語と芥川 の作品..... 190	「海戦」讚..... 274	「語らざる人」につい て..... 309	風土..... 308
「盲目物語・聞書抄」				[由起しげ子]
				「語らざる人」につい て..... 309
				[幸田文]

「みそっかす」について.....311	[亀井勝一郎]	石川啄木の魅力...369	講演 詩と私.....402	新潮と私.....466
[庄野潤三]	東洋の美の正しき理	啄木のこと.....369	挽歌について.....412	文芸時評.....467
愛撫.....312	解.....338	[島木赤彦]	万葉名歌十首.....415	文学開眼.....470
庄野潤三氏について.....313	出色の中国旅行記.....339	赤彦と私.....371	「きりん」の頃.....422	解釈の自由ということ —歴史小説家の手帳から
庄野潤三氏の短篇.....315339	[若山牧水]	私のイメージ・名歌と 名画.....424	—.....472
[吉行淳之介]	亀井さんの言葉...340	若山牧水のこと...372	詩人としての江上さん	正確な文章.....473
[「吉行惇之介全集」 推薦文].....317	[中島健蔵]	[「若山牧水全歌集」 推薦文].....375	「風景」と私.....427	妊娠調節と特殊列車474
「鞆の中身」について.....317	「点描・新しい中国」を 読む.....343	牧水の魅力.....376	好きな詩.....428	ご返事.....475
[有馬頼義]	中島氏のこと.....344	[窪田空穂]	富士の歌—忘れがたい	新聞記者の十年...477
[「失脚」推隠文].....318	中島健蔵氏のこと345	九十歳のりっぱさ..377	帰還兵の作—.....430	立原章平氏へ.....478
[北杜夫]	中島さんのこと.....347	[川田順]	ある感慨.....431	文章今昔.....479
「木精」を読んで...318	[高橋義孝]	幕末愛国歌.....378	わたしの一首.....432	人間が書きたい...480
[立原正秋]	高橋義孝氏のこと348	西行研究録.....379	今日の文学.....433	作家生活八年目...481
立原正秋・二題...320	[臼井吉見]	[生方たつゑ]	貼紙絵.....434	書きたい女性.....483
「立原正秋文学展」序323	「安曇野」について350	[「生方たつゑ選集」推 薦文].....380	質的にみた淋しさ..435	私の取材法.....484
八月の午後.....323	[十返(とがえり)筆]	[「歌集 火の系譜」推 薦文].....380	たれか新聞記者を書 くものはないか.....436	書き出し—自然に、素直 に—.....485
[司馬遼太郎]	十返筆のこと.....352	生方さんの仕事...381	人生の始末書.....437	風景描写—現地へ行っ てノートする—.....487
「殉死」私見.....315	[山本健吉]	推薦の言葉.....381	作品の周囲.....438	伊豆の風景.....488
「ひとびとの登音(きょう おん)」について.....326	山本氏との別れ...354	生方さんの仕事...382	芥川賞を受けて...439	作家のノート.....489
[山崎豊子]	[江藤淳]	[「人生音痴」推薦 文].....383	二つの文学賞—永井龍 男氏へ—.....440	天風浪浪.....541
「暖簾」について...327	優れた伊東静雄論	極北に立った鋭さ..383	文学と私.....441	言葉について I ...542
いっきに読ませる面白 さ.....328356	[角川源義]	「法王庁の抜穴」の面 白さ.....443	直言に答える—篠田— 士氏へ—.....544
[小林秀雄]	[森田たま]	角川さんとゴルフ..384	小説は誰でも書ける か.....444	「蒼き狼」の周囲...545
小林さんのこと...329	森田さんのこと.....358	月の人の.....386	私の好きな作中人物447	歴史小説の主人公550
小林さんのこと...330	[小泉信三]	文学エッセイ	私の理想の女性...448	王朝日記文学につい て.....552
[河上徹太郎]	「海軍主計大尉小泉 信吉」を読む.....359	大阪の星座.....391	壁を相手の新聞小説450	自作「蒼き狼」につい て.....558
揚州に於ける河上氏332	[「小泉信三全集」推 薦文].....361	私の詩のノートから392	私と文壇.....453	言葉の話.....566
[中村光夫]	感銘深い小泉信三 さん.....362	「きりん」創刊のころ395	締切り.....454	宝石と石ころ.....568
旅の話.....334	「海軍主計大尉小泉 信吉」を読んで.....364	現代詩に望む.....397	将来は芸術家に...456	文学を志す人々へ— 詩から小説へ—.....570
「明治五年」について336	[桑原隲蔵(じつぞう)]	「長恨歌」讃.....397	私の小説作法.....459	「宇治十帖」私見...574
	桑原隲蔵先生と私366	「風景」と詩.....399	小説とモデル.....463	小説の材料.....576
	[石川啄木]	私の好きな短歌一つ401	作中人物.....465	

講演 小説について	感想..... 671	第25巻	新制作派展評..... 375	法隆寺のこと..... 423
..... 578	孔子の言葉..... 673	美術エッセイ	関西作家院展出品画	歴史のかけら—北斎と
言葉についてⅡ... 590	“負函”の日没—「孔子	美しきものとの出会い	展..... 376	法隆寺と—..... 428
芥川賞受賞の頃... 592	取材行—..... 674 13	二科展評..... 377	法隆寺..... 429
作家生活十四年... 594	負函..... 682	カルロス四世の家族	青龍展を見る..... 378	わが愛するもの 法隆
文學界と私..... 595		—小説家の美術ノート—	時局解説 美術界の	寺..... 430
老舎先生の声..... 597	古典書と美術書... 691 101	決戦体制..... 380	白鳳・天平の美..... 431
作家生活十六年... 598	私の愛読書..... 693	ゴッホの星月夜—小説	—水会展評..... 382	湖畔の十一面観音
「沙石集」を読んで600	私の読書遍歴..... 694	家の美術ノート—..... 149	新燈社展..... 383 432
三つの作品..... 602	スケジュールをたてる	忘れ得ぬ芸術家たち	文展の日本画・洋画	春の十一面観音像
新春所感—忘れられぬ 696 201 384 434
文章—..... 604	古典への道しるべ—天	レンブラントの自画像	春の青龍社展..... 385	渡岸寺十一面観音像
文字 文字 文字..... 605	心の「茶の本」に大きな感	—小説家の美術ノート—	陸軍美術展..... 385 435
N君のこと..... 607	銘—..... 697 259	大日展評..... 386	十一面観音..... 436
講演 歴史と小説... 609	茶の本..... 698	*	新興美術協会展評	湖畔の十一面観音
明治の資料..... 617	英雄物語の面白さ—	関西日本画壇展望 387 444
講演 明治の風俗資料	「世界山岳全集」にふれて 315	戦時文展を見る... 388	日本の彫刻 飛鳥時
..... 618	—..... 699	東京画壇展望..... 324	第二回京展評..... 389	代..... 446
千利休を書きたい 625	小林高四郎「ジンギス	院展評..... 335	日展の不人気..... 390	日本絵巻物全集第一
短篇の河原..... 626	カン」Ⅰ、Ⅱ..... 701	青龍展..... 338	院展日本画を観る391	巻 源氏物語絵巻 447
講演 歴史小説と史実	ふたつの作品..... 703	文展評..... 340	青龍社展評..... 392	ノートから..... 448
..... 629	自分で選ぶ喜び... 704	伝統について..... 343	美術断想..... 393	龍安寺の石庭..... 450
正確な言葉..... 640	読書について..... 705	青龍社展評..... 347	行動美術展評..... 397	わが家の「蘭疇」... 451
作家七十歳..... 641	遠い読書の思い出	作家の誠実..... 348	二科展評..... 398	私の東大寺..... 454
枯れかじけて寒き..... 643 707	奉祝展日本画評... 352	日展を見る..... 399	作家の関心..... 459
私の文章修業..... 646	読書のすすめ..... 708	無名仏讃..... 354	日本画の新人群... 401	明治の洋画十選... 461
郭沫若先生のこと 649	必読の書..... 709	院展・青龍展所感..... 357	純美術家の工芸品製	日本の伝統工芸の美
歴史小説と私..... 650	私にとっての座右の	春の青龍社展..... 360	作..... 402	しさ..... 466
日本文化の独自性	書..... 710	小西謙三氏油絵展	日本画と額縁..... 403	おしゃれな観音さま—
..... 651	三冊の本..... 714 360	現実遊離の画境... 403	室生寺十一面観音像—
巴金先生へ..... 656		乾坤社展をみる... 361	連合展を見る..... 405 467
私のライフ・ワーク 658		院展と青龍展..... 362	院展評..... 406	日本国宝展を見て 468
いまの日本人を見て		院展私観..... 364	院展を見る..... 407	美しいものとの取引き
頂きたい—フランシス・キ		文展評 日本画... 366	創造美術展を見る 407 470
ング氏への返書—..... 661		大東亜戦争美術展を	美術記者..... 408	虚空の庭..... 471
煎風の五月—国際ベン		見る..... 367	美しきものとの出会い	いつでも小さい像に光
大会に寄せて—..... 663		春の美術展から... 368 411	が..... 477
中央公論社と私... 664		春陽会展評..... 370	竹竹竹..... 417	唐招提寺・ノート... 478
巴金先生と私..... 666		国展評..... 371	手帳..... 419	大きな宝石箱..... 480
講演 共存共栄の哲学		美術の鑑賞..... 372	好きな仏像..... 421	「沖縄の陶工 人間国
..... 668		青龍展評..... 374	如来形立像..... 422	宝 金城次郎」序... 483

人間文化財への熱情 484	旅の平山さん..... 535	いる美術..... 573	セザンヌ「壺の花」622	利休と親鸞..... 686
「鉄斎の仙境」など487	平山さんのこと..... 535	肯定と否定..... 574	女性に神を見出した 時代..... 623	天武天皇..... 687
梅華書屋図..... 490	「平山郁夫全集2 歴 書の国・中国..... 576	豪華絢爛たる開花577	青く大きな空..... 624	「観無量寿経」讚... 708
関雪を悼む..... 492	訪大和路」序..... 537	「明清工芸美術展」に 寄せて..... 579	モナ・リザ私見..... 626	歴史に学ぶ..... 709
関雪追想..... 493	「平山郁夫シルクロー ド展」によせて..... 538	澄んだ華麗さ..... 580	ミレーの「晩鐘」につ いて..... 628	私の中の日本人—親 鸞と利休—..... 713
橋本関雪生誕百年の 展覧会に寄せて... 495	加山又造展図録序文 539	「漢唐壁画展」を見て 581	レンブラントの「老ユ ダヤ人の肖像」につ て..... 629	船のこと港のこと... 716
須田国太郎のこと—嵐 山の遅桜—..... 496	加山又造氏の仕事 540	長信宮灯について581	“天命”秘めた団欒の 美しさ..... 630	持統天皇..... 717
須田国太郎の「野薔 薇」..... 500	協田和氏の作品... 542	「韓国美術五千年展」 を見て..... 582		西行と利休..... 729
福井良之助氏のポエ ジー..... 501	西山英雄氏のこと 546	回教寺院、その他 585	歴史エッセイ	利休の人間像..... 732
高山辰雄氏のポエジ ー..... 502	西山さんのお仕事 547	「敦煌壁画写真展」に 寄せて..... 591	中尊寺と藤原四代635	遺跡とロマン..... 733
聖家族 讚..... 504	福田さんのこと..... 548	加彩騎馬武士俑... 593	戦国時代の女性... 636	歴史の顔..... 738
上村松篁展の意味 505	三岸節子展に寄せて 549	「古代エジプト展」を見 て..... 594	遣唐船のこと..... 638	
上村松篁氏と私... 508	三岸さんの独自なとこ ろ..... 551	雲岡・菩薩像..... 596	日本の英雄..... 640	
東山魁夷氏の「窓」 510	舟越さんのこと..... 553	敦煌千仏洞点描... 597	茶々の恋人..... 641	
東山魁夷氏の作品 512	秋野さんのこと..... 554	敦煌莫高窟の背景 603	戦国時代の女性... 643	
「瑞光」の前に立ちて 514	青邨先生のこと..... 555	序・敦煌の美術..... 607	木乃伊考..... 649	
「行く秋」を前に..... 515	河井寛次郎論..... 557	敦煌一三〇窟の弥勒 大仏像..... 608	武将の最期..... 652	
近藤悠三氏のこと 516	杉本健吉「新平家・画 帖」上..... 558	中国文物展ノートから 610	鑑真和上のこと..... 653	
[近藤悠三作陶五十 年近作展推薦文] 520	島田謹介写真集「旅 窓」..... 559	西域・千年の華..... 614	古代説話のこころ 655	
近藤さんのこと..... 520	画家になった美術記 者..... 560	高官の生活風景を描 いた壺..... 615	「鑑真和上」「鑑真」 657	
生沢氏の仕事..... 522	秋山さんの仕事... 562	二十周年を慶ぶ... 616	絵巻物による日本常 民生活絵引..... 659	
[生沢朗個展推薦 文]..... 523	塔..... 562	アンリ・ルソーの「人形 を持てる少女」につ て..... 617	茶々のこと..... 660	
生沢朗氏と私..... 523	土門拳の仕事..... 565	「かたまり」とリズム— イタリア現代彫刻展を観る —..... 618	千利休..... 662	
[生沢朗水墨画展推 薦文]..... 525	入江泰吉「古色大和 路」..... 567	二つの主題..... 619	モラエスのこと..... 666	
平山郁夫氏の道... 525	小山富士夫編「中国 名陶百選」..... 569	ゴヤについて..... 620	ゴンチャロフの容貌 673	
平山郁夫氏と一緒の 旅..... 530	ナゾの古代都市—パキ スタン古代文化展をみて— 570	ドガ「少女像」..... 622	明治五年..... 675	
平山郁夫氏のこと 533	白瑠璃碗..... 571		戦国時代の天正十年 677	
	死せる遺跡と生きて		仏教讃歌「親鸞」のこ と..... 679	
			讃歌 親鸞..... 681	
			叙事詩的世界の魅力 684	

第26巻	石山寺のこと..... 129	九月の風景..... 210	み..... 499	行の来日を喜ぶ..... 562
日本紀行	湖畔の城..... 130	街..... 211	遺跡保存二、三..... 500	北京の正月..... 563
穂高の月..... 13	大津美し..... 130	天竜川の旅..... 212		廖(りょう)承志先生
梓川的美しさ..... 15	大津美し..... 133	旅のノートから..... 215	中国の旅から..... 503	の逝去を悼む..... 564
上高地..... 17	仁和寺..... 134	信濃川と私..... 216	世界の大きな星は落	胡耀邦総書記の来日
穂高行..... 19	冬の京都..... 135	正月の旅..... 218	ちた..... 519	を歓迎する..... 566
滝谷を見る..... 22	京の春..... 137	美しい川..... 220	充実した二十年..... 520	葵丘会議の跡を訪ね
ただ穂高だけ..... 23	塔..... 142	忘れ得ぬ村..... 222	大きく、烈しく、優しく	て..... 567
登山..... 25		私の好きな風景..... 224 522	葵丘と都江堰..... 569
沢渡部落..... 27	北国の城下町—金沢—	旅情..... 233	明るくなった国..... 523	中国の友人の皆さん
残したい静けさ美しさ 145	川の話..... 235	雲崗石窟を訪ねて..... 527	の来日を歓迎して..... 570
..... 28	金沢城の石垣..... 146	一文字の風景..... 236	春風吹万里..... 528	朱穆之文化相の来日
豪雨の穂高..... 29	早春の甲斐・信濃..... 147	千曲川..... 239	敦煌の旅..... 530	を歓迎して..... 571
梓川沿いの樹林..... 32	紀の国・伊豆・信濃	「旅と人生」について	文芸復興期の中国	中華人民共和国建国
穂高美し..... 36 149 240 532	三十五周年を祝って
穂高の紅葉..... 38	薄雪に包まれた高山	旅情・旅情・旅情..... 246	新たな信頼と信義の 572
風の奥又白..... 39	の町..... 151	日本の風景..... 252	関係..... 539	年頭にあって..... 574
新隆浩作品集「穂高」	早春の伊豆・駿河..... 153	川と私..... 257	周揚先生を団長とす	告別の辞..... 575
序..... 41	伊豆生れの伊豆礼讃		る中国作家代表団の	創立三十周年を迎え
穂高..... 44 157	外国紀行	来日を喜ぶ..... 540	て..... 577
初冬の大雪山..... 45	北尾鐮之助「富士箱	異国の旅..... 261	楽しい充実した二十	中国文明ゆりかごの
大佐渡小佐渡..... 45	根伊豆」..... 160	河岸に立ちて—歴史の	日間..... 541	地を訪ねて..... 578
佐渡の海..... 61	富士美し..... 161	川 沙漠の川—..... 375	黄河の流れ..... 542	二十五回目の訪中
岩手県の鬼剣舞..... 64	夜叉神峠..... 163	*	長城と天壇..... 543 579
雪の下北半島紀行..... 66	私の高野山..... 168	東京の敦煌..... 475	最も幸せな作品..... 546	新しい年の始めに..... 580
平泉紀行..... 72		広州のこと..... 477	新たな発展の年..... 546	王蒙文化相の来日を
	瀬戸内海的美しさ..... 175	黄色い大地..... 478	大黄河..... 548	歓迎して..... 581
私の東大寺..... 89	佐多岬紀行—老いたる	中国は大きい..... 480	胡楊の夜..... 550	「中日文化賞」を受賞
奈良と私..... 92	駅長と若き船長—..... 176	中国散見..... 482	桂林讃..... 551	して..... 582
飛鳥の地に立ちて..... 98	沖縄の一週間..... 192	井上靖・中国カメラ紀	会長就任に当って..... 553	年頭にあって..... 583
大和路たのし..... 102	沖縄の印象..... 195	行..... 483	年頭の言葉..... 554	敦煌の歴史を知って
二月堂お水とり..... 104	沖縄のところにふれる	四年目の中国..... 484	創立二十五周年を迎	ほしい..... 584
お水取りと私..... 104 196	中国の旅—鑑真逝世千	えて..... 555	年頭にあって..... 585
お水取り・讃..... 112	南紀の海に魅せられ	二百年記念行事—..... 486	私と南京..... 556	周揚さんを悼む..... 586
大和朝廷の故地を訪	て..... 197	旧知貴ぶべし..... 489	年頭に当たって..... 558	新しい年の始めに..... 587
ねて..... 114	海..... 199	揚州の雨..... 490	鳴沙山の上に立ちて	中国人民対外友好協
美しい囃の管—祇園祭	南紀美し..... 200	揚州の旅..... 492 559	会代表団、中国国家
を観る—..... 122	明るい風景 暗い風	中国の旅—国慶節に招	これこそ本当の文化	文物局代表団を歓迎
美しい京の欠片(かけ	景..... 203	かれて—..... 494	交流..... 561	して..... 588
ら)..... 126	旅先にとらえた季節	再び揚州を訪ねて..... 497	日中国交正常化十周	韓国の春..... 589
嵐山と三千院..... 127 205	ふしぎな美しいはにか	年を祝い王震団長—	美しくけなげな韓国学

生.....590	ってー.....687	第27巻	幻覚の街ヒワ.....455	熱.....521
韓国紀行.....591	わが娘に与うー作家の	西域エッセイ	幻覚の街ヒワにて456	民族の足跡 交流の
韓国に古きものをた	父からー.....694	西域に招かれた人々	西トルキスタンの旅	華.....523
ずねて.....593	愛される女性ー女の美9457	シルクロードの風と水
ニューヨークにて...607	しきー.....695	西域紀行1	シルクロードの旅..460	と砂と.....524
欧米の街・東京の街	結婚というもの.....696	アフガニスタン紀行 39	若い日の夢.....463	インダス溪谷を下る
ー新春に想うー.....608	お祝いのことば.....697	アレキサンダーの道	砂丘と私.....465527
ドイツ人のこと.....613	親から巣立つ娘へ69867	天山の麓の町.....471	ペルセポリスの遺址
井上靖・欧州カメラ紀	娘の結婚.....701	遺跡の旅・シルクロー	シェルパの村.....473535
行.....615	長女の結婚.....702	ド.....161	草原の旅 アフガニス	講演 最近の西域の
ダイナミックな美ー「ロ	嫁ぎし娘よ、幸せに	シルクロード地帯を訪	タン.....475	旅から.....541
ーマ・オリンピックー九六704	ねて.....303	並河万里の仕事...476	ボロブドール遺跡に
〇」を見るー.....616	愛についての断章705	クシャーン王朝の跡を	沙漠の国の旅から	立ちて.....553
私のオリンピック...617	女性の美しさ.....713	訪ねて.....321478	若羌(チャルクリク)という
珠玉の広場ヴェネツィ	今年大学を卒業する	*.....	民族興亡の跡にーアフ	集落 西域南道の旅
ア.....617	わが娘とその友達に	岩村忍「アフガニスタ	ガニスタンー.....481555
アメリカの休日.....619714	ン紀行」.....435	回教国の旅.....483	異国辺境の子供たち
アメリカ紀行.....622	「恋愛と結婚」につい	カラコルム.....436	カメラで捉えた遺産557
旅の収穫.....641	て.....715	今西錦司「カラコラ484	ミーラン遺址.....559
日の丸・二題.....643	ある空間ー親と子の関係	ム」・日本映画新社監	並河万里「シルクロー	河西回廊の町.....562
モスクワ・レニングラ	ー.....720	修「カラコルム」.....437	ド砂に埋もれた遺産」	歴史の通った道...564
ード.....645	自分が自分であること	深田久弥「ヒマラヤー	序.....485	文明の十字路口に新た
ニコライのアイコン...655722	山と人ー」.....438	沙漠の町の緑.....486	な光.....567
旅で見る家.....657	幸福の探求.....724	メソポタミア.....440	レンズに憶えておいて	漢代且末(しまつ)国
シベリアの列車の旅	青春とは何か.....726	「さまよえる湖」につい	貰った“沙漠の旅,, 489	の故地.....568
.....659	子供と季節感.....728	て.....441	アナトリア高原の“謎	法顕の旅.....571
シベリア紀行.....661	講演 人間と人間の関	シルクロードへの夢	の民族,,.....491	哈密(はみ)を訪ねる
旅の話.....666	係.....729442	沙漠と海.....500574
シベリアの旅.....668	若者たちのエネルギー	西域のイメージ.....444	土器の欠片.....502	壺「貴族の生涯」...580
人生論・女性論	ー.....738	中央アジアの薔薇446	並河万里「シルクロー	「なら・シルクロード博
男はどんな女性に魅	面を上げ、胸を張って	サマルカンドの市場に	ド」序文.....506	を終えて」.....581
力を感じるか? ...673739	て.....446	西域の旅から.....507	
美しい服装.....674	三つの教訓.....740	砂漠の詩.....447	西域の山河.....509	
善意について.....676		デローシュ=ノーブル	限りなき西域への夢	
少年老いやすしー教科		クール「トウトアंकア512	
書の中の時限爆弾ー..679		モン」.....449	ホータンを訪ねる..514	
女であるために.....681		天山とパミール.....451	トルファン街道.....515	
女のひとの美しさ..683		「大宛」へ寄せる夢ー	命なりけり.....518	
私の恋愛観ー自作に沿		ロシア旅行で訪れたいー	カイバル峠を越えパ	
	453	キスタンへ.....519	
			行けぬ聖地ゆえの情	

第28巻	「サンデー毎日」大衆	小説新潮サロン・懸賞	旺文社児童文学賞	本山物語.....618
西域紀行2	文芸.....400	コント.....473532	山西省の重要性...637
私の西域紀行.....9	「サンデー毎日」百万	山の放送劇.....475	高校生の読書体験記	太田伍長の陣中手記
現代語訳	円懸賞小説.....419	女流文学賞.....476	コンクール.....534639
更級日記.....273	「サンデー毎日」小説	野間文芸賞.....487	伊藤整文学賞.....541	現地報告 敢闘する
西行.....313	賞.....421	吉川英治賞.....497	雑稿	農村②近畿①.....640
舞姫.....369	たばこ製造専売五〇	吉川英治文学賞...499	現代先覚者伝(抄)	玉音 ラジオに拝して
選評	年記念懸賞小説...425	吉川英治文化賞...506545643
「少国民新聞」投稿詩	芥川龍之介賞.....427	北日本文学賞.....508	*	耕しながら考える一福
.....389	文學界新人賞.....457	川端康成文学賞...518	徳島県阿部村.....605	井県鶴山農場の例一..644
「きりん」投稿詩.....390	小説新潮賞.....468	大仏次郎賞.....526	点心.....611	

別巻 (この巻だけは長い行が多いので、2段組に変更)**自作解説**

「井上靖小説全集」自作解説.....25	「井上靖歴史小説集」内容見本 著者の言葉.....109
*	「井上靖歴史小説集」あとがき(抄).....110
「新文学全集 井上靖集」あとがき.....77	「シルクロード詩集」あとがき.....119
私の処女作と自信作.....78	「シルクロード詩集 増補愛蔵版」あとがき.....120
私の代表作.....80	「井上靖エッセイ全集」内容見本 著者のことば..120
原作に固執せず.....81	「井上靖エッセイ全集」あとがき.....121
井上靖年譜.....82	「井上靖展」図録序.....125
「旅路」あとがき.....90	「井上靖自伝的小説集」内容見本 著者のことば..126
「私たちはどう生きるか 井上靖集」まえがき.....91	「井上靖自伝的小説集」あとがき.....127
「井上靖自選集」著者の言葉.....92	中国語訳「井上靖西域小説選」序.....130
わたしの好きなわたしの小説.....93	中国語訳「西域小説集」序.....131
「詩と愛と生」あとがき.....94	「シリア沙漠の少年」序.....132
「三ノ宮炎上」と「風林火山」.....95	婦人倶楽部と私.....133
「自選井上靖短篇全集」内容見本 著者のことば..95	頼育芳訳「永泰公主的項鍊」序.....134
「射程」ほか.....96	*
「詩画集 北国」あとがき.....97	[明治の月]
「詩画集 珠江」あとがき.....98	「明治の月」をみる.....136
「井上靖小説全集」内容見本 著者のことば.....98	[流星]
二十四の小石.....99	「流星」(自作自註).....137
「歴史小説の周囲」あとがき.....103	[猟銃]
「井上靖の自選作品」あとがき.....104	私の言葉.....139
「私の歴史小説三篇」について.....105	[闘牛]
「西域をゆく」あとがき.....106	「闘牛」について.....139
英訳井上靖詩集序文.....107	作品「闘牛」について.....140
「現代の随想 井上靖集」あとがき.....108	「闘牛」の小谷正一氏.....141
	[通夜の客]
	「吉岡文六伝」を読む.....142

[その人の名は言えない]	「風林火山」と新国劇.....	165
映画「その人の名は言えない」を観る.....	私の夢.....	143
「その人の名は言えない」あとがき.....	「風林火山」について.....	144
[黯い潮]	[春の海図]	
暗い透明感.....	「春の海図」作者の言葉.....	145
[白い牙]	[魔の季節]	
「白い牙」の映画化.....	「魔の季節」作者の言葉.....	147
[黄色い靴]	[嫉捨]	
「黄色い靴」作者の言葉.....	「嫉捨」.....	148
[山の湖]	[短篇集「愛」]	
「山の湖」あとがき.....	映画「愛」原作者の言葉.....	148
[戦国無頼]	[篝火]	
「戦国無頼」について.....	「篝火」について.....	149
「戦国無頼」のおりょうへ.....	[淀どの日記]	150
[春の嵐]	淀どの日記.....	
「春の嵐」あとがき.....	受賞の言葉.....	151
[緑の仲間]	山田五十鈴さんと「淀どの日記」.....	
「緑の仲間」作者の言葉.....	山田さんと「淀どの日記」.....	152
明るい真昼間の勝負.....	[真田軍記]	153
[座席は一つあいている]	真田軍記の資料.....	
「座席は一つあいている」作者の言葉・ランナー寸感.....	「本多忠勝の女」について.....	154
[風と雲と砦]	[満ちて来る潮]	
「風と雲と砦」作者の言葉.....	登場人物を愛情で描く.....	157
「風と雲と砦」原作者として.....	映画化された私の小説「満ちて来る潮」.....	157
「風と雲と砦」壮大なドラマ化の中で.....	[黒い蝶]	158
[若き怒濤]	「黒い蝶」読者の質問に答える.....	
「若き怒濤」作者の言葉.....	[白い風赤い雲]	179
[あすなる物語]	「白い風赤い雲」作者の言葉.....	
「あすなる物語」作者の言葉.....	[白い炎]	183
[花と波濤]	[氷壁]	
「花と波濤」作者の言葉.....	「氷壁」わがヒロインの歩んだ道.....	160
紀代子に托して.....	美那子の生き方.....	161
[昨日と明日の間]	[天平の臺]	
「昨日と明日の間」をみて.....	「天平の臺」の登場人物.....	161
[戦国城砦群]	「天平の臺」について.....	
「戦国城砦群」作者のことば.....	心温まる“普照”との再会.....	162
[風林火山]	「天平の臺」の作者として.....	
「風林火山」の劇化.....	「天平の臺」上演について.....	163
「風林火山」原作者として.....	「天平の臺」の読み方.....	163
「風林火山」の映画化.....	「天平の臺」の作者として.....	164

「天平の躰」ノート.....	193	[盛装]	
[犬坊狂乱]		「盛装」作者の言葉.....	222
犬坊狂乱について.....	195	[風濤]	
[地図にない島]		作品「風濤」の喜び.....	223
「地図にない島」作者の言葉.....	196	「風濤」韓国訳の序に替えて.....	224
[揺れる耳飾り]		[塔二と弥三]	
「揺れる首飾り」作者の言葉.....	197	「塔二と弥三」について.....	224
[朱い門]		[紅花]	
「朱い門」あとがき.....	197	「紅花」作者のことば.....	225
[ある落日]		[楊貴妃伝]	
「ある落日」作者の言葉.....	198	「楊貴妃伝」の作者として.....	226
「ある落日」あとがき.....	198	原作者として.....	227
[楼蘭]		[後白河院]	
「楼蘭」の舞踊化.....	199	「後白河院」の周囲.....	228
「楼蘭」新装版あとがき.....	199	[凍れる樹]	
[川村権七逐電]		「凍れる樹」作者の言葉.....	232
「川村権七逐電」作者のことば.....	200	[化石]	
[敦煌]		判らぬ“一鬼”の運命.....	232
辺境地帯の夢抱いて.....	201	映画「化石」と小説「化石」.....	234
「敦煌」作品の背景.....	202	[おろしや国酔夢譚]	
敦煌を訪ねて.....	203	「おろしや国酔夢譚」の旅.....	236
小説「敦煌」の舞台に立ちて.....	206	「おろしや国酔夢譚」の舞台.....	247
小説「敦煌」ノート.....	210	受賞の言葉.....	249
敦煌 砂に埋まった小説の舞台.....	213	日本漂民の足跡を辿って.....	250
[河口]		[西域物語]	
「河口」作者の言葉.....	214	「西域物語」作者の言葉.....	259
[月光]		[ローマの宿]	
「月光」作者の言葉.....	214	「ローマの宿」作者の言葉.....	259
[群舞]		[花壇]	
「群舞」作者の言葉.....	215	「花壇」作者のことば.....	260
「群舞」著者のことば.....	215	[本覚坊遺文]	
[洪水]		本覚坊あれこれ.....	260
「洪水」上演について.....	216	「本覚坊遺文」ノート.....	262
[蒼き狼]		[異国の星]	
「蒼き狼」について.....	216	「異国の星」作者の言葉.....	267
原作者のことば.....	217	[異域の人他]	
原作者として.....	218	新版「異域の人 自選西域小説集」あとがき.....	268
[しろばんば]		[孔子]	
「しろばんば」の幸運.....	219	いまなぜ孔子か.....	268
「しろばんば」私の文学紀行.....	220	小説「孔子」の執筆を終えて.....	272
「しろばんば」の挿絵.....	221	中国の読者へ.....	276

雑纂

[追悼文]..... 285

古知君のこと 渋沢敬三氏を悼む 永松君へのお別れのことば [鹿倉吉次追悼文] 堂谷さんと私
 竹林君のこと 吉川先生のこと 高野君のこと・弔詞 弔詞(露木豊) 追悼・廖(りょう)承志先生
 北京でのひと時 平岡君のこと 森さんのこと 永野さんの笑顔 野間さんのこと 弔詞(今里廣記) **桑原武夫さんの死を悼む** 弔辞(斎藤五郎)
 巨星奔り去る 五島さんへ

[監修者・編集者の言葉]..... 301

「現代世界ノンフィクション全集」監修にあたって
 「日本の詩歌」編集委員のことば 昔の海外旅行
 「若い女性の生きがい」編者の言葉 全集「10冊の本」完結に当たって 「世界の名画」編集委員のことば 「日本の名画」編集委員のことば 「現代日本紀行文学全集」監修者の一人として 「世界紀行文学全集」監修者の一人として **「大宅壮一全集」編集委員のことば** 「カンヴァス世界の大家」編集委員のことば 「日本の名山」監修の言葉 「武者小路実篤全集」刊行によせて 「日本の庭園美」の監修にあたって

[公演等パンフレット]..... 309

すゞらんグループ公演「商船テナシテイ」 瀬川純
 シャンソン・リサイタル 小沢征爾指揮日フィル特別演奏会 松美会開催によせて 前進座公派「屈原」三代目花柳寿輔襲名披露舞踊会 前進座三十五周年興行 島田帯祭 前進座東日本公演 「天山北路」芸術祭大賞受賞記念 和泉会別会 くない会 森井道男「花木なかば」出版記念会 歌劇「香妃」公演 東宝ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」公演 中国越劇日本初公演 松竹九〇年の正月に 入江さんから教わったこと 橘芳慧さんへのお祝いの詞 「世田谷芝能」によせて 歌舞伎・京劇合同公演 和泉狂言会 日中合作大型人形劇「三国志」特別公演に寄せて

[展覧会パンフレット]..... 323

田辺彦太郎油絵個人展 **須田国太郎遺作展** 今井

善一郎作品展 杉本亀久雄個展 石川近代文学館開館記念「郷土作家三人展」 第十六回印刷文化展 小林勇水墨画展 彫刻の森美術館に寄せて 第六回人間国宝新作展 世界写真展「明日はあるか」 国宝鑑真和上像中国展 中国を描く現代日本画展 ガンダーラ美術展 二村次郎写真展「巨樹老木」 小野田雪堂展 東京富士美術館「中国敦煌展」 神奈川近代文学館「大衆文学展」 白川義員写真展「仏教伝来」 牧進展に寄せて なら・シルクロード博覧会 三木武夫・睦子夫妻芸術作品展 近代日本画と万葉集展 西山英雄展

[その他小文]..... 335

消息一束 おめでとう 本紙創刊五周年に寄せて 最近感じたこと あにいもうと 七人の侍 顔 近況報告 私の夏のプラン 屋上 作家の言葉 「大衆文学代表作全集 井上靖集」筆蹟 オレンジアルバム 評 オレンジアルバム 作者のことば わたしの一日 私の抱負 ふいに訪れて来るもの 編集部的一年間 私の誕生日 作家の二十四時 友への手紙 識見を感じさせる作品 孤愁を歌う 作家 清新さと気品 「婦人朝日」巻頭筆蹟 「現代国民文学全集 井上靖集」筆蹟 「小説新潮」巻頭筆蹟 菊村到 新しい可能性 読書人の相談相手として 三友消息 青い眺め 日本談義復刊100号に寄する100名の言葉 三役の弁 穂高沖ノ島 「週刊女性自身」表紙の言葉 「私たちはどう生きるか井上靖集」筆蹟 独自の内容と体裁 「高校時代」巻頭筆蹟 三友消息 税務委員会報告 さくら 「日本現代文学全集 井上靖・田宮虎彦集」筆蹟 レジャーと私 娘と私 編集方針を高く評価 私の好きなスター 私の好きな部屋 横綱の弁 私の生命保険観 「昭和文学全集井上靖」筆蹟 社会人になるあなたへ 作家の言葉 ベニス 香川京子さん 駿河銀行大阪支店開店広告文 帝塚山大学推薦のことば 京劇西遊記 「現代の文学 井上靖集」筆蹟 井上吉次郎氏のこと 「婦人公論」のすすめ The East and the West 作家の顔 「婦人公論」の歩みを讃える 「われらの文学 井上靖」筆蹟 アトリエ風の砦 「豪華版日本文学全集 井上靖集」筆蹟 木村国喜に注文す

る 岡田茉莉子 型を打ち破る 加藤泰安氏のこと 居間で過ごす楽しみ ハワイ焼けした井上靖さん 「詩と愛と生」筆蹟 吉兆礼讃 「群舞」東方社新文学全書版筆蹟 小坂徳三郎君に、私たちの希望を託したい。 三木さんへの期待 文学界と私 「現代日本文学大系 井上靖・永井龍男集」筆蹟 週刊新潮掲示板 版画の楽しさ、美しさ ロートレックのスケッチ 東大寺のお水とり 雑然とした書棚 美術コンサルタント サヨナラ フクちゃん 「作家愛蔵の写真」解説 広い知性と教養 野心作への刺激に… 序文 茶室を貴ぶ 観無量寿経集註 小料理「稲」案内文 **朝比奈隆氏と私** 怒りと淋しさ 初めて見る自分の顔 「井上靖の自選作品」筆蹟 美しく眩しいもの 佐藤さんと私 「月刊美術」を推せんする 私と福栄 「政策研究」巻頭言 大きな役割 原文 兵衛後援会入会のしおり 信夫さんのこと 「月刊京都」創刊によせて 井上靖一シリーズ日本人 [好きな木] 養之如春 新会長として 成人の日に 二十年の歩み 役員の一員として [便利堂会社概要] 小林さんのこと 週刊読売と私 徳沢園のこと [沼津市名誉市民に選ばれて] 元秀舞台四十年 庶民の体験のなかに感動のドラマが 週刊新潮掲示板 わが人生観 文学館の先駆 岡崎嘉平太「終りなき日中の旅」 オリオンと私 「中華人民共和国現代絵画名作集」推奨の辞 [修善寺工業高校創立五十周年記念寄稿文] 竹内君と私 二十五周年に寄せて 「シルクロード幻郷」巻頭言 「なら・シルクロード博」ごあいさつ 小誌「かぎろひ」に期待する 「なら博」の建築 奈良県新公会堂ごあいさつ 「むらさき亭」を名付けるにあたり 月刊「しにか」創刊によせて 尽己 詩集「いのち・あらたに」に寄せて

[歌詞]..... 398
修善寺農林高等学校校歌 山高ければ 吉原工業高等学校校歌 沼津聾学校校歌 集英社社歌 天城中学校校歌 羽後中学校校歌 北陸大学校歌

[碑文]..... 404
沼津駅前広場母子像碑文 宝蔵院史碑文 修善

寺工業高校碑文 世界貿易センタービルディング基礎の辞 秋田県西馬音内小学校碑文 「内灘の碑」碑文 徳田秋声募碑撰文 滋賀県向源寺(渡岸寺観音堂)碑文 山本健吉文学碑撰文 舟橋聖一生誕記念碑文 長崎物語歌碑撰文 沼津東高校碑文 新高輪プリンスホテル新宴会場の命名 妙覚寺碑文 上山田町碑文

[序跋]..... 410
中村泰明「詩集 烏瓜」序 「創作代表選集13」あとがき 村松喬「異郷の女」序 船戸洪吉「画壇 美術記者の手記」序 安川茂雄「霧の山」序 濱谷浩「写真集 見てきた中国」序 伊藤祐輔「石糞」序 齊藤諭一「愛情のモラル」序 大竹新助「路」序文 「きりんの本5・6年」序 「川」あとがき 大隈秀夫「露草のように」序 山本和夫「町をかついできた子」序 山下政夫「円い水平線」序 永田登三「関西の顔」序 「半島」まえがき 辻井喬「宛名のない手紙」あとがき 小林敬三「宣伝のラフとフェアウェイ」序 池山広「漆絵のような」序 西川一三「秘境西域八年の潜行」序 宮本一男「ハワイ二世物語」序 山崎央「詩集 单子論」序 野村米子「歌集 憂愁都市」序 井上吉次郎「通信と対話と独語と」序 ヤクボーフスキー他著・加藤九祚訳「西域の秘宝を求めて」序 椿八郎「鼠の王様」序 「現代の式辞・スピーチ・司会」序文 A・マルチンス・J「夜明けのしらべ」序 岸哲男「飛鳥古京」序 加藤九祚「西域・シベリア」序 赤城宗徳「平将門」序 伊藤祐輔「歌集 千本松原」序 岩田専太郎画集「おんな」跋 今田重太郎「穂高小屋物語」序 生沢朗画集「ヒマラヤ&シルクロード」序 石岡繁雄「屏風岩登攀記」序 櫻野朝子「運命学」序 「日本教養全集15」あとがき 「わが青春の日々」上巻序 白川義員作品集「アメリカ大陸」序文 秋山庄太郎作品集「薔薇」序 **大西良慶「百年を生きる」跋** 「秘境」序 浦城二郎訳「宇津保物語」序 **持田信夫「ヴェネツィア」序** 井上由雄「詩集 太陽と棺」序 生江義男「ヒッパロスの風」序 尾崎稲穂「蟋蟀(こおろぎ)は鳴かず」序 椿八郎「『南方の火』のころ」序 北条誠「舞扇」まえがき 石川忠行「古塔の大和路」序 「観る聴く 一枚の繪対話集」 本木心

掌「峠をこえて」序 土門拳「女人高野室生寺」序
 安田登紀子仏画集「仏像讃美」序文 「長谷川泉詩集」序 筆内幸子「丹那婆」序 入江泰吉写真集3
 「大和の佛像」序 長井洞著・長井浜子編「続・真向一途」序 松本昭「弘法大師入定説話の研究」序
 坂入公一歌集「枯葉帖」序 白井史朗「古寺巡礼ひとり旅」序 柳木昭信写真集「アラスカ」序 「世界出版業2 日本」序言 坪田歆一編「文典」序 「回想 小林勇」あとがき 「熱海箱根湯河原百景」序
 「北日本文学賞入賞作品集」序 「中国 心ふれあいの旅」序 白川義員作品集「中国大陸 下巻 天壤無限」序文 屠国壁「楼蘭王国に立つ」序 「日本の名随第33 水」あとがき 「日本国立公園」序 大場啓二「まちづくり最前線」序 段文傑「美しき敦煌」序 水越武写真集「穂高 光と風」序 「写真集 旧制四高青春譜」序 白川義員作品集「仏教伝来2 シルクロードから飛鳥へ」序 「西域・黄河名詩紀行」序 TBS特別取材班「シベリア大紀行」序
 「西域・黄河名詩紀行」序 TBS特別取材班「シベリア大紀行」序 「高山辰雄自選画集」英語版序 入江泰吉写真集「新撰大和の仏像」序 駒澤晃写真集「佛姿写伝・近江一湖北妙音」序文 田川純三「絲綢之路行」序 **持田信夫遺作集「天空回廊」**序 舒乙「北京の父 老舎」跋 「中国漢詩の旅」序 「日本の短篇上」序 斯波四郎「仰臥の眼」序 「茶の美道統」序

[アンケート回答]..... 492
 文芸作品推薦あんけいと アンケート わたしのペット 甘辛往来 二つのアンケート 美味求心 時計と賞金 今日の時勢と私の希望 初めてもらったボーナスの使い方 梅本育子詩集「幻をてる人」への手紙 NHKに望むこと 先輩作家に聞く 読書アンケート 一九五六年型女性私の選んだ店 戦後の小説ベスト5 批評家に望む 芸術オリンピック—建築— 旅行なくて7くせ 「あまカラ」終刊によせて 受賞作家へのアンケート

[推薦文]..... 499
 「卒業期」 若杉慧「青春前期」 佐藤春夫「晶子

曼陀羅」 現代女性講座 岸田国土長編小説全集 長谷部成美「佐久間ダム」 日本人の生活全集 世界大ロマン全集 新田次郎「孤島」 新版世界文学全集 富士正晴「游魂」 斯波四郎「禽獸宣言」 加藤てい子「廓の子」 中国詩人選集 世界文学大系 堀辰雄全集 獅子文六作品集 新名将言行録 決定版世界文学全集別巻 シャーロック・ホームズ全集 野口富士男「ただよい」 土門拳「ヒロシマ」 新選現代日本文学全集 野口富士男「海軍日記」 現代人の日本史 萩原朔太郎全集 ふるさと伊豆 瓜生卓造「氷原の旅」 堀田善衛「上海にて」 現代語訳 古典日本文学全集 日本地理風俗大系 世界文学全集 ゲーテ全集 世界名著大事典 野島の調べ 福田宏年「山の文学紀行」 エリオット全集 日本文学鑑賞辞典 日本文学全集 続日本の名城 世界の歴史 少年文学代表選集 大屋典一「孤雁」 平野岑一「世界第六位の新聞」 世界美術大系 安藤更生「日本のミイラ」 図説世界文化史大系 日本山岳名著全集 佐藤春夫監修「古戦場」 歴史小説の旅 岩波文庫 世界の文学 岩波国語辞典 続歴史小説の旅 安藤更生「鑑真」 世界の文化地理 岩波国語辞典 ロシア・ソビエト文学全集 魯迅選集 高木健夫「新聞小説史稿」 日本近代文学図録 ヘディン中央アジア探検紀行全集 漢詩大系 世界文化シリーズ 島田謹介写真集「信濃路」 福田宏年「バルン氷河紀行」 潤一郎新々訳源氏物語 世界の文化 日本の歴史 日本の合戦 歷程詩集 折口信夫全集 フローベール全集 町春草「たのしい書」 少年少女日本の歴史 **世界の名著** (貝塚さんの『論語』を読んで) 西域探検紀行全集 「日本の美術」創刊 世界の戦史 世界の遺跡 立川昭二「鉄」 新十八史略 世界の名画 洋画100選 角田房子「アマゾンの歌」 購読 社国語辞典 **林屋辰三郎「日本 歴史と文化」** 人物・日本の歴史 角川日本史辞典 ジュニア版日本の文学 日本詩人全集 日本の文学 中国の思想 旺文社国語実用辞典 中国文学名作全集 日本文学の歴史 日本古典文学大系 近代日本の文豪 小島直記「岡野喜太郎伝」 日本短篇文学全集 **吉川幸次郎全集** 新潮日本文学小辞典

新版西洋美術史 新潮世界文学 奈良六大寺大観
 現代日本文学大系 新異国叢書 牛島秀彦「アメリカの白い墓標」 工藤一三「柔道の技法」 定本モラエス全集 美術文化シリーズ 岩波講座 世界歴史 日本の名著 世紀別日本と世界の歴史 児島桂子「一死刑囚への祈り」 現代日本の文学 県史シリーズ 角川国語辞典 新版 モラエス「おヨネとコハル・徳島の盆踊(抄)」 有吉佐和子選集 茶道美術全集 現代版画 日本高僧遺墨 池大雅「瀟湘八景扇面帖」 豊田穰「長良川」 東西文明の交流 岩波国語辞典 第二版 特選名著複製全集 近代文学館 複製日本古典文学館 日本の花木 日本古地図集成 永野重雄「和魂商魂」 小高根二郎「詩人伊東静雄」 世界紀行文文学全集 豪華保存版 絵巻・日本の歴史 石森延男児童文学全集 **嵯峨野** 手塚富雄全訳詩集 藍紙本萬葉集 陶磁大系 御物集成 藤田信勝「余録抄」 トルストイ全集 野村尚吾「伝記 谷崎潤一郎」 文房四宝 菅野邦夫「草木と遊ぶ」 美術研究完全復刊 日本国語大辞典 日本庶民文化史料集成 CLASSICA JAPONICA 現代韓国文学選集 現代日本文学アルバム 堀勝彦「写真集 アンナプルナ・ヒマール」 雅楽 アイヌ絵集成 久松潜一監修「萬葉集講座」 全釈漢文大系 彦火火出見尊繪巻 田中仙翁 「茶の心」 深井晋司「ペルシアのガラス」 蔵書版新字源 日本生活文化史 芹沢光治良作品集 大乘仏典 韓国美術全集 中国怪奇全集 入江泰吉「萬葉大和路」 顔真卿祭姪文稿 野村尚吾「浮標燈」 石坂洋次郎「わが日わが夢」 人物日本の歴史 覆刻渡辺畢山真景・写生帖集成 角川日本史辞典第二版 故宮博物院 新修日本絵巻物全集 船山馨小説全集 考古の旅 ローマの噴水 芝木好子作品集 原色茶道大辞典 ほるぷ日本の名画 ウエハラ・ユクオ「ハワイの声」 覆刻日本の山岳名著 平田郷陽作品集「衣裳人形」 コンサイス世界年表 石田茂作「聖徳太子尊像聚成」 **貝塚茂樹著作集** 角川蔵書版辞典セット 岸哲男「萬葉山河」 奥野健男文学論集 小松茂美「平家納経の研究」 唐墨名品集成 油井一ニコレクション 美の宝廊 **石黒孝次郎「古く美しきもの」** 日本原始美術大系 郭沫若選集 壬辰戦亂史 加藤義一郎「茶盃抄」 高専柔道の真髓 佐多稲子全集 現代日本画家素描集 創作陶画資料 茶の本 入江泰吉「佛像大和路」 国宝綴織当麻曼陀茶羅 日本書蹟大鑑 敦煌への道 日本文学全史 藤島亥治郎「塔」 瓜生卓造「スキー風土記」 東山魁夷画文集 源豊宗「日本美術史論究」 新修大津市史 購談社インターナショナル 昭和萬葉集 吉川靈華画集 桑田忠親著作集 平山郁夫「現代日本巨匠選 浄瑠璃寺」 春名徹「にっぽん音吉漂流記」 小島烏水全集 在外日本の至宝 加藤楸邨全集 小松茂美「国宝元永本古今和歌集」 日本現代文学全集 敦煌莫高窟 蔵 陳舜臣「中国の歴史」 速水御舟《作品と素描》 升本順子「シルクロードの女たち」 竹内栖鳳 中国の博物館 **梅原猛著作集** 日本大歳時記 未完の対局 松本和夫「シルクロード物語」 近代文人の書画 會津八一全集 複製日本の雑誌 石元泰博「湖国の十一面観音」 草人木書苑 草人木書苑 染織大辞典 広漢和辞典 古典大系日本の指導理念 安嶋彌「虚と実と」 日本の原爆文学 長澤和俊「シルクロード踏査行」 前田千寸「複製版日本色彩文化史」 富岡鐵齋印譜集「魁星閣印譜」 エボカ 密教美術大観 木本誠二「謡曲ゆかりの古蹟大成」 D&R・ホワイトハウス「世界考古学地図」 大谷家蔵版新西域記 復刻版 **末永雅雄「日本史・空から読む」** 魯迅全集 観音経繪巻 秘仏十一面観音 新潮世界美術辞典 アジア歴史事典 新撰墨場必携 世界の民話 石田幹之助著作集 文人畫粹(画粹)編 中国篇 遥かなる文明の旅 葉上照澄「願心」 河村藤雄「六代目中村歌右衛門」 日本現代詩辞典 **樋口隆康「シルクロード考古学」** 黄河図 昭和文学全集 少年少女世界文学館 裘沙画集「魯迅の世界」 松田壽男著作集 日本の絵巻 原色茶花大事典 学習漫画 中国の歴史3 鑑賞中国の古典 冬青 小林勇画集 「科学と文芸」復刻版 「新しき村」復刻版 小松茂美「古筆学大成」 秋岡コレクション 世界古地図集成 加藤勝代「わが心の出版人」 影印本 天王寺屋会記 明治文学全集 小松茂美「日本絵巻聚稿」 浦西和彦・浅田隆・太田登「奈良近代

文学事典」 日本の名随筆 岩波講座 現代中国
田川純三「大黄河をゆく」 保坂登志子「青の村 山
本和夫文学ガイド」 中国石窟シリーズ シルク
ロードの民話 国際交流につくした日本人 日本
地名資料集成 ビデオライブラリー敦煌 槇有恒
全集 I 憧憬 萬里の長城 ひろさちや「仏教の歴
史」 毎日学校美術館

補遺

[詩歌]

オリンピアの火..... 609
友..... 609
郷愁..... 610
西域四題..... 610
沙漠の花..... 611
桂江..... 611
フンザ溪谷の眠り..... 612
日本の春—うずしお・さくら・飛天—..... 613
車..... 613

[自伝エッセイ]

伊豆の海..... 614
受賞が縁で毎日に入社..... 615
私の結婚..... 616
ペンが記録した年輪..... 617
幼き日の正月..... 619
星のかけら..... 621

[文学エッセイ]

この人に期待する—文学—..... 622
1947年の回顧—文学—..... 623
創作月評..... 624
佐藤先生の旅の文章..... 624
「詩と詩論」その他..... 626
竹中さんのこと..... 628
知的な虚構の世界..... 631
山本さんのこと..... 634

[随想]

今年の春..... 636
中国文学者の日本の印象..... 638
育った新しい友情..... 639
設立三十周年を祝す..... 641

[美術エッセイ]

静物画の強さ..... 643
銀製頭部男子像燭台(部分)..... 644

[紀行]

ありふれた風景なれど..... 645
木々と小鳥と..... 648
わたしの山..... 651
敦煌・揚州..... 652
文明を生み育て葬る..... 655

[選評]

第十一回読売短編小説賞選後評..... 657
新文章読本..... 657

別巻補遺

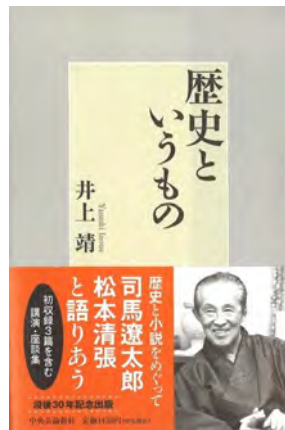
[自作解説] 「天平の薨」映画化のよろこび [追悼
文] 和歌森さんのこと [監修者・編集者の言葉]
「日本文学全集」編集委員のことば 「黄文弼著作
集」監修者のことば [展覧会パンフレット] 石川
近代文学館展 [その他小文] 扉のことば フォ
トエッセイ 「岩稜」お祝の詞 **私と京都ホテル**
[序祓] 北岡和義「檜花 評伝 阿部武夫」序 矢野
克子「詩集 空よ」序 [アンケート回答] 30人への
3つの質問 [推薦文] 串田孫一随想集 少年少
女世界名作文学全集 世界の旅 太田亮「姓氏家
系大辞典」 日本の考古学 ひろすけ絵本 石
坂洋次郎文庫 日本歴史シリーズ 日本建築史基
礎資料集成 愛蔵版世界文学全集 ドキュメント
苦小牧港 世界陶磁全集 日本の美 現代日本写
真全集 学研漢和大事典 近代洋風建築シリーズ
切手 山本健吉全集 八木義徳全

最後に、全集以外で今回参考にした情報や本をまとめてみます。まず、

井上靖記念文化財団 <http://www.inouezaidan.or.jp/>
 そして2021年、貴重な対談(鼎談)をまとめた本が2冊発行されたことに、遅ればせながら2021年末に気がきました。



2021.5.30 朝日新聞出版



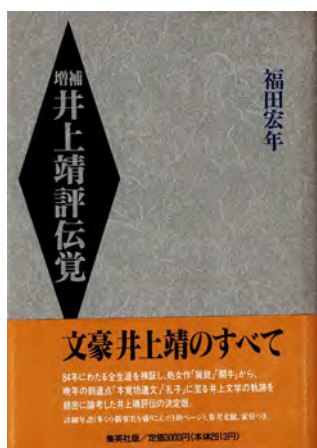
2021.10.10 中央公論新社

とりわけ、「歴史というもの」の方では、偶然にも本文中で話題にした松本清張さんや司馬遼太郎さんとの鼎談が2編収録されていたので少々おどろきました。

井上家の方々による以下の本も貴重です。



井上卓也(二男) 1991 文藝春秋



福田宏年(井上ふみ夫人の次兄の娘婿) 1991 集英社



黒田佳子(二女) 2000 潮出版社



浦城いくよ(長女) 2016 ユフォーブックス

また、伊吹和子さん(1929-2015元京都大学文学部国語学国文学研究室勤務→中央公論社)の「めぐり逢った作家たち」平凡社2009でも興味深い話が紹介されています。

井上さんの小説を味わう上で、以下のムックにある写真などは筆者にとってたいへんありがたいです。



1985 日本交通公社



1991 毎日新聞社



2007 平凡社

なお、文藝春秋七十年史[資料編](1994)の総目次より、以下の作品があります(Sは昭和、続く数字は年・月)が、座談会・対談以外は全集に収録されていると思います。

小説 S25・4 S25・7~10 S26・8 S27・2 S28・12 S29・7 S30・1 S30・5 S30・12 S31・10 S32・6 S33・7 S34・10~S35・7 S38・1 S41・1~S42・12 S43・5 S45・1 S54・3

詩 S37・7 S40・6 S51・2

ノンフィクション全般 S38・6 S43・8 S49・1~S50・6 S51・8~9 S53・1~S54・2 S54・4~6 S55・1~S56・12

読物・随筆等 S31・3 S33・3 S44・6 S46・1~S47・3 S47・7 S60・9

座談会・対談 S28・3(「人生は長い眼で」、中野好夫・林譲治・松澤一鶴・岸道三・手島志郎らと) S37・2(「シルクロードの虹」、ライシャワーと)

さらに、本文中に転載した「同級生交歓」に加え、「日本の顔」として、井上さんが1970年8月(63歳)、朝比奈さんが1979年6月(70歳)に、それぞれ登場しておられます。

一方、動画は以下のNHKのウェブサイトにあります。

NHK あの人に会いたい File No.72 井上靖

https://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0009250072_00000

NHK あの人に会いたい File No.138 朝比奈隆

https://www.nhk.or.jp/archives/people/detail.html?id=D0009250138_00000